

社会资本整備総合交付金事業主要地方道山中伊切線に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

加賀市
水田丸遺跡

2011

石川県教育委員会
(財)石川県埋蔵文化財センター

み ず た ま る
水田丸遺跡

2011

石川県教育委員会
(財)石川県埋蔵文化財センター

例　　言

- 1 本書は水田丸遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は加賀市水田丸町地内である。
- 3 調査原因是緊急地方道路整備事業主要地方道山中伊切線であり、同事業を所管する石川県土木部道路建設課（南加賀土木総合事務所）が、石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 4 調査は財團法人石川県埋蔵文化財センターが石川県教育委員会から委託を受けて、平成 18（2006）年度から平成 22（2010）年度にかけて実施した。業務内容は現地調査、出土品整理、報告書原稿作成および報告書刊行である。
- 5 調査に係る費用は石川県土木部道路建設課（南加賀土木総合事務所）が負担した。
- 6 現地調査は平成 18・19（2007）年度に実施した。期間・面積・担当課・担当者は下記のとおりである。
 - (1) 平成 18 年度（第 1 次調査）
期　間　平成 18 年 9 月 7 日～同年 10 月 5 日
面　積　300m²
担当課　調査部調査第 3 課
担当者　澤辺利明（調査専門員）、大路葉子（嘱託調査員）
 - (2) 平成 19 年度（第 2 次調査）
期　間　平成 19 年 5 月 1 日～同年 6 月 8 日
面　積　450m²
担当課　調査部調査第 3 課
担当者　土屋宣雄（調査専門員）、宮川勝次（主任主事）
- 7 出土品整理は平成 19・20（2008）年度に実施し、平成 19 年度は企画部整理課が、平成 20 年度は調査部県関係調査グループが担当した。
- 8 報告書原稿作成は平成 21（2009）年度に、報告書刊行は平成 22 年度に実施し、調査部県関係調査グループが担当した。執筆分担は下記のとおりである。編集は土屋宣雄（調査部県関係調査グループ専門員）が行った。
第 1・3 章　澤辺利明（調査部特定事業調査グループ専門員）、第 2・4・5 章　土屋宣雄
- 9 調査には下記の機関の協力を得た。
石川県土木部道路建設課、石川県南加賀土木総合事務所、加賀市教育委員会
- 10 調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。
- 11 本書の凡例は下記のとおりである。
 - (1) 方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標系第Ⅷ系に準拠した。
 - (2) 水平基準は海拔高であり、T. P.（東京湾平均海面標高）による。
 - (3) 出土遺物番号は挿図と写真で対応する。

目 次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 現地調査	1
第3節 出土品整理、報告書原稿作成・刊行	2
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 遺跡の位置と地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 第1次調査の結果	7
第1節 概要	7
第2節 検出遺構・遺物	7
第4章 第2次調査の結果	16
第1節 概要	16
第2節 検出遺構・遺物	16
第5章 まとめ	34

挿図目次

第 1 図 工事計画と調査区の位置 (S=1/ 1,000)	1	第 16 図 第 2 次調査遺構平面図 4・断面図 4 (S=1/40)	24
第 2 図 遺跡の位置	3	第 17 図 第 2 次調査遺構平面図 5・断面図 5 (S=1/40)	25
第 3 図 周辺の遺跡 (S=1/25,000)	5	第 18 図 第 2 次調査遺構平面図 6・断面図 6 (S=1/40)	26
第 4 図 調査区全体図 (S=1/200)	7	第 19 図 第 2 次遺構平面図 7・断面図 7 (S=1/40)	27
第 5 図 遺構平面図 (1 区 S=1/80)	10	第 20 図 第 2 次調査遺構平面図 8・断面図 8 (S=1/40)	28
第 6 図 遺構平面図 (2・3 区 S=1/80)	11	第 21 図 第 2 次調査出土遺物実測図 1 (S=1/2・3・6)	29
第 7 図 遺構断面図 (S B S=1/40)	12	第 22 図 第 2 次調査出土遺物実測図 2 (S=1/3・6)	30
第 8 図 調査区壁・遺構断面図 (S E・S K S=1/40)	13	第 23 図 第 2 次調査出土遺物実測図 3 (S=1/3・6)	31
第 9 図 出土遺物実測図 1 (S=1/3)	14	第 24 図 第 2 次調査出土遺物実測図 4 (S=1/3)	32
第 10 図 出土遺物実測図 2 (S=1/3)	15	第 25 国 第 1・2 次調査区全体(合成)図 (S=1/500)	34
第 11 国 第 2 次調査区全体図 (S=1/300)	16		
第 12 国 第 2 次調査遺構平面図 1 (S=1/100)	20		
第 13 国 第 2 次調査遺構平面図 2・断面図 1 (S=1/100・40)	21		
第 14 国 第 2 次調査遺構断面図 2 (S=1/50)	22		
第 15 国 第 2 次調査遺構平面図 3・断面図 3 (S=1/40)	23		

表 目 次

第 1 表 周辺の遺跡	6	第 3 表 第 2 次調査出土遺物観察表 1	32
第 2 表 出土遺物観察表	9	第 4 表 第 2 次調査出土遺物観察表 2	33

図版目次

図版 1 第 1 次調査遺構	図版 7 第 2 次調査遺構 4
図版 2 第 1 次調査遺構	図版 8 第 2 次調査遺構 5
図版 3 第 1 次調査遺物	図版 9 第 2 次調査遺構 6
図版 4 第 2 次調査遺構 1	図版 10 第 2 次調査遺構 7
図版 5 第 2 次調査遺構 2	図版 11 第 2 次調査遺物 1
図版 6 第 2 次調査遺構 3	図版 12 第 2 次調査遺物 2

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

発掘調査は、県土木部道路建設課所管の緊急地方道路整備事業主要地方道山中伊切線に伴うものである。

主要地方道山中伊切線（県道39号）は、加賀市南方の山間に位置する加賀市山中温泉こおろぎ町と日本海に面した同市伊切町を結び、延長約22kmを測る。山中温泉こおろぎ町からは動橋川沿いに北上し、片山津温泉を経て、北陸自動車道片山津IC近くで県道20号加賀小松線に接続する。調査区域はこおろぎ町から約6km北上した地点にある。

石川県教育委員会文化財課では毎年、関係部局に対し次年度実施予定事業の内容照会を行い、各事業について埋蔵文化財の保護が図られるよう調整を行っている。上記道路事業計画については先に松山C遺跡（中西ほか2001）で発掘調査が実施されており、道路建設課と協議しながら、順次、分布調査等により埋蔵文化財包蔵地の有無を確認していく。本遺跡については、平成18年6月13日に文化財課が実施した分布調査により、新発見の遺跡「水田丸遺跡」（古墳時代の集落跡）として確認されたもので、工事計画との調整から平成18年度に北側の300mを、平成19年度に南側の450mの調査を実施することとなった。

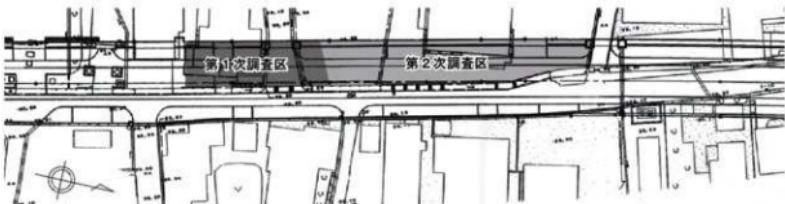
第2節 現 地 調 査

道路建設課（南加賀土木総合事務所）から依頼を受けた石川県教育委員会からの委託事業として、平成18・19年度に（財）石川県埋蔵文化財センターが実施し、調査部調査第3課が担当した。

平成18年度調査（第1次調査）

300mの発掘調査を実施した。調査は澤辺利明、大路葉子が担当した。

平成18年8月8日に南加賀土木総合事務所、文化財課、（財）石川県埋蔵文化財センターによって現地協議が行われ、工事計画や調査範囲、ユニットハウス設置場所、駐車場所等を確認した。細長い調査区中程には生活道路・水路が横断しており、この道路・水路範囲（2区と呼称）は最後に調査することとし、まず2区の南側（1区）を、次いで2区の北側（3区）の調査を実施することとなった。9月7・8日に重機による表土除去を行い、9月8日からは作業員による発掘作業にも着手した。9月15日までに1区の遺構掘削を終了。9月20日に3区の遺構掘削終了。9月25日に1・3区の埋



第1図 工事計画と調査区の位置 (S=1/1,000)

め戻しおよび2区の表土除去を実施し、9月28日までに遺構掘削および採図を終了。10月5日に発掘調査機材を撤収し、同日、南加賀土木総合事務所に現場を引き渡し現地調査を完了した。なお、9月20日には地元加賀市立東谷口小学校6年生を対象に現地説明会を開催した。

平成19年度調査（第2次調査）

450m²の発掘調査を実施した。調査は土屋宜雄、宮川勝次が担当した。

平成19年4月11日に南加賀土木総合事務所、文化財課、（財）石川県埋蔵文化財センターによって現地協議が行われ、工事計画や調査範囲、排土置場、ユニットハウス設置場所等を確認した。5月1・2日に重機による表土除去を行い、5月7日からは作業員による発掘作業に着手した。5月8・9日に遺構検出作業を行い、6月4日までに遺構削除作業及び遺構平面図の作成等を終了した。また、5月16日には、昨年度同様地元の加賀市立東谷口小学校6年生を対象に体験発掘もあわせた現地説明会を開催している。6月7日に発掘調査機材を撤収し、6月8日に南加賀土木総合事務所に現場を引き渡し現地調査を完了した。

○調査体制（平成18年度）

調査期間	平成18年9月7日～同年10月5日（現地調査）
調査主体	JR石川県埋蔵文化財センター（理事長 中西吉明）
範 囲	前田憲治（専務理事）
事 務	山下淳哉（事務局長）
範 囲	宅崎仁芳（範務課長）
經 理	熊谷省吾（経理課長）
調 査	谷内尾智司（所長兼企画部長） 湯尻修平（調査部長） 藤田邦雄（調査第3課長）
担 当	澤辺利明（調査第3課調査専門員） 大路糸子（調査第3課嘱託調査員）

○調査体制（平成19年度）

調査期間	平成19年5月1日～同年6月8日（現地調査）
調査主体	JR石川県埋蔵文化財センター（理事長 中西吉明）
範 囲	前田憲治（専務理事）
事 務	山下淳哉（事務局長）
範 囲	宅崎仁芳（範務課長）
經 理	熊谷省吾（経理課長）
調 査	谷内尾智司（所長兼企画部長） 湯尻修平（調査部長） 藤田邦雄（調査第3課長）
担 当	土屋宜雄（調査第3課調査専門員） 宮川勝次（調査第3課主任主事）

第3節 出土品整理、報告書原稿作成・刊行

道路建設課（南加賀土木総合事務所）から依頼を受けた石川県教育委員会からの委託事業として、平成19～22年度に（財）石川県埋蔵文化財センターが実施した。出土品整理は調査終了次年度に順次行った。整理内容は遺物の記名・分類・接合・実測・トレースおよび遺構実測図のトレースであり、平成19年度は企画部整理課が、平成20年度は調査部県関係調査グループが担当した。報告書原稿作成は平成21年度に調査部県関係調査グループが担当し、報告書刊行は平成22年度に調査部県関係調査グループが担当した。

○整理体制（平成19年度）

調査期間	平成19年4月2日～同年4月9日
調査主体	JR石川県埋蔵文化財センター（理事長 中西吉明）
範 囲	前田憲治（専務理事）
事 務	山下淳哉（事務局長）
範 囲	宅崎仁芳（範務課長）
經 理	熊谷省吾（経理課長）
整 理	谷内尾智司（所長兼企画部長） 垣内光次郎（整理課長）
担 当	澤辺利明（調査第3課調査専門員） 横山そのみ（整理課主任技術員） 西川朗聖（整理課嘱託）

○整理体制（平成20年度）

調査期間	平成21年3月6日～同年3月23日
調査主体	JR石川県埋蔵文化財センター（理事長 中西吉明）
範 囲	黒崎幸作（専務理事）
事 務	栗山正文（事務局長）
範 囲	笠置利雄（範務グループリーダー）
經 理	谷内孝夫（範務グループ専門員）
整 理	湯尻修平（所長） 三浦純夫（調査部長） 伊藤雅文（県関係調査グループリーダー）
担 当	土屋宜雄（県関係調査グループ専門員） 宮川勝次（県関係調査グループ主任主事） 新谷由子（特定事業調査グループ主任技術員） 馬場正子（特定事業調査グループ主任技術員） 林かおる（特定事業調査グループ嘱託） 西川朗聖（特定事業調査グループ嘱託）

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

水田丸遺跡は加賀市水田丸町に所在する。

加賀市は平成17(2005)年10月1日に旧加賀市と江沼郡山中町が新設合併をして誕生した。県の南西端に位置し、北は日本海、東は小松市、南から西にかけては福井県勝山市、坂井市、あわら市に接する。米作りを中心とした農業地帯である半面、九谷焼、漆器などの伝統工芸も活発である。また、片山津温泉、山代温泉、山中温泉に代表される加賀温泉郷を有するなど、県内有数の観光都市でもある。市の中心街である大型寺は、加賀藩3代藩主前田利常の三男、利治により治められた大型寺藩10万石の城下町であった。

同市は北西-南東方向に伸びており、南東端の大日山(標高1368m)から連なる標高200~300mほどの丘陵(江沼丘陵)が、緩やかに傾斜しながら北西部の江沼平野へとつづいている。平野では海岸線に平行して連なる低丘陵(橋立丘陵)が江沼丘陵との間に江沼盆地を形成しており、ともに大日山系を水源とする動橋川が盆地の東部を、大聖寺川が盆地の西部を流下している。

動橋川は江沼丘陵に東谷とよばれる河谷を形成しているが、本遺跡はその谷口(東谷口)にある水田丸町の県道沿いに位置する。遺跡のすぐ南には加賀市立東谷口小学校があり、発掘調査中には同校児童が、何度も見学に訪れた。

第2節 歴史的環境

本遺跡周辺の縄文時代の遺跡では塔尾遺跡(県No.06214)、塔尾B遺跡(06217)、小坂遺跡(06222)、横北遺跡(06226)などがある。縄文時代後期中葉から晩期前半にかけての横北遺跡では炉跡や配石遺構、土壤、土器棺などが検出され、石斧や石棒などの石器類、深鉢・鉢・壺等に加え、菱形をした注口土器や有孔球状土製品などが出土している。

弥生時代の遺跡では二子塚東田遺跡(06231)や勅使遺跡(06241)がある。二子塚東田遺跡では弥生時代中期から後期のものと思われる土器片が少數出土している。勅使遺跡では弥生時代終末期から古墳時代初頭の月影式とみられる壺、壺、有孔鉢などの土器が出土している。その北方およそ500mの地点には平成19(2007)年に発掘調査が行われた松山D遺跡があり、掘立柱建物・土坑・溝のほか、古墳時代の円墳の周溝、平安時代の掘立柱建物、中世の溝などが検出されている。

古墳時代の遺跡は本遺跡より南方に須谷横穴群(06213)、塔尾横穴群(06216)のほか、北方の江沼盆地周辺に多く分布する。本遺跡から動橋川沿いを1kmほど下ったところには国指定史跡の法皇山横穴群(記3、06248)や横北横穴群(06224)がある。古墳時代後期の法皇山横穴群は法皇山を取り巻くように分布する横穴墓からなり、その数は確認されている77基を含め約200基に及ぶと推定



第2図 遺跡の位置

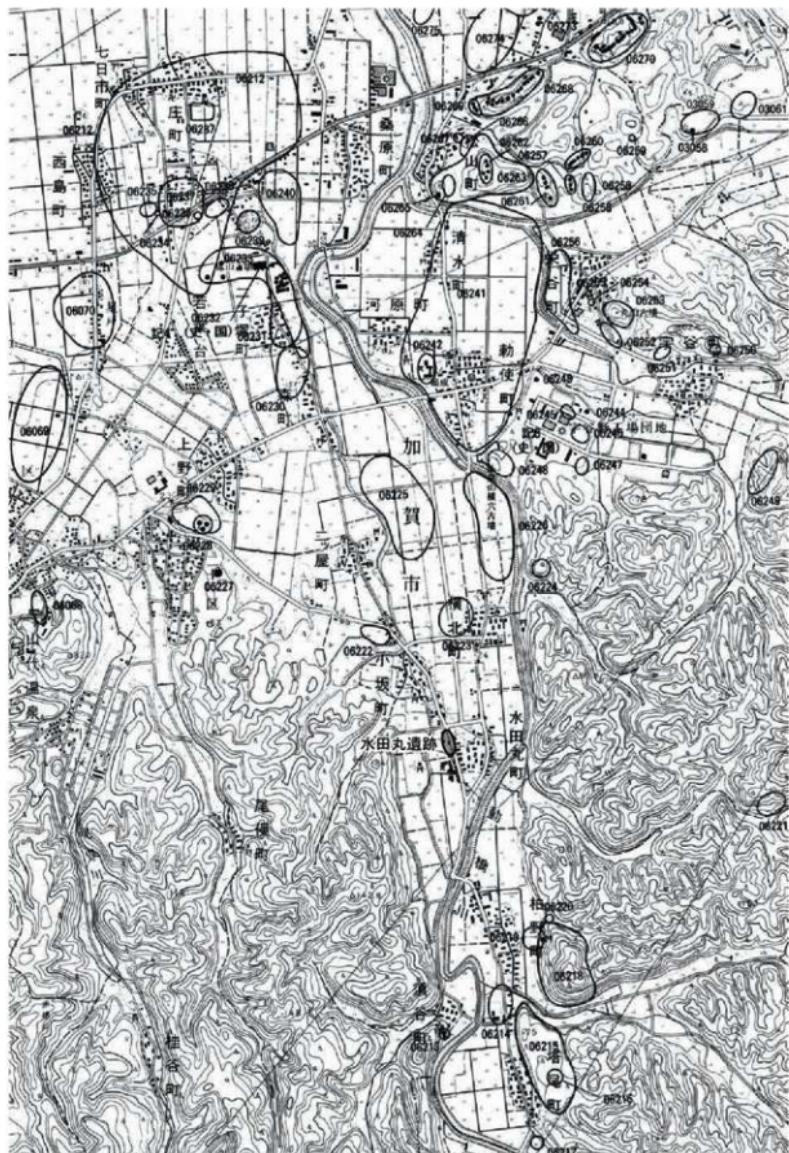
される。現在は史跡公園として整備されている。さらに1kmほど流下した二子塚地域では二子塚クマノミヤ遺跡（06230）、二子塚古墳群（06233）、国指定史跡の狐山古墳（06232）など、中期から後期にかけての遺跡がある。前方後円墳である狐山古墳は墳丘の形態などから5世紀後半の築造と考えられており、後円部に箱形石棺を擁し、中には壯年男子の遺骸とともに画文帶神獸鏡など多くの副葬品が確認されている。他方、二子塚地域の北東方向に位置する江沼丘陵上では、古墳時代前期のものと思われる遺跡が相対的に多く、分校カン山古墳群（06270）、分校チャカ山古墳群（06268）、松山古墳群（06262）など、いずれも4～5世紀の築造と推定されるものである。

古代の遺跡では、南方の塔尾遺跡（06214）、東方丘陵上の宇谷B遺跡（06221）で土師器や須恵器が確認されているほか、勅使遺跡（06241）、庄・西島遺跡（06212）などがある。庄・西島遺跡の奈良・平安時代のものと推定される大規模な集落跡は、奈良時代の津波倉廃寺（06237）を含むことなどから、政治的・中枢的な機能を担っていたと考えられる。さらに、南端地点では奈良時代後期の小鏡治跡が確認されているほか、津波倉廃寺の西隣に位置する西島B遺跡（06234）では和同開珎が出土している。また、栄谷町から北東方向の小松市那谷町にいたる県道沿いに存在する那谷B遺跡は平成12（2000）・13（2001）年度に発掘調査が行われており、奈良・平安時代の集落跡が確認されている。

中世の遺跡では、南方に柏野城跡（06218）、柏野寺跡（06219）、塔尾超勝寺跡（06215）、柏野中世墓（06220）などがある。柏野寺は『白山記』に白山五院の一つとして記されており、柏野出土の室町時代前期の作とみられる「銅造地蔵菩薩半跏像」が関連遺物として知られる。塔尾超勝寺跡は、永正3（1506）年に越前で起こった一向一揆で朝倉氏に敗れ、国外追放された藤島超勝寺が越前帰住への根据地とした場所である。北方の江沼盆地では勅使遺跡（06241）、勅使館跡（06242）、松山城跡（06263）などの遺跡がみられる。勅使館跡は南北約180m、東西約160mを測る規模の館跡で、堀や土塁等で区画された郭は、主郭を中心としてその南側（南郭）・北側（北郭）と主郭及び南郭の東側（東郭）に設けられている。13～14世紀初頭に隆盛したと考えられており、掘立柱建物や井戸等も検出し、越前焼や瀬戸・美濃焼などに加え、中国製の青磁や宋銭などが出土していることから当時の広範な流通を物語っている。

引用・参考文献

- 石川県教育委員会 1992 『石川県遺跡地図』
- 石川県郷土資料館 1973 『加賀能登出土の名宝』石川県立郷土資料館開館五周年記念展図録
- 萩中正和 1991 『勅使遺跡』 加賀市教育委員会
- 加賀市史編纂委員会 1978 『加賀市史』通史上巻 加賀市役所
- 田嶋明人・湯尻修平 1974 『加賀市二子塚遺跡群調査概報』『石川県埋蔵文化財調査報告書2』 石川県教育委員会
- 田嶋明人¹²⁶ 1978 『江沼古墳群分布調査報告』『石川考古学研究会誌』第21号 石川考古学研究会
- 田嶋正和¹²⁶ 1981 『勅使館跡発掘調査報告』 加賀市教育委員会
- 田嶋正和¹²⁶ 1986 『勅使館跡』 加賀市役所
- 中西洋司¹²⁶ 2001 『加賀市松山C遺跡』(財)石川県埋蔵文化財センター
- 西田郁乃¹²⁶ 2004 『小松市那谷B遺跡』(財)石川県埋蔵文化財センター
- 森田平次 1936 『加賀志徵』上編 石川県図書館協会
- 谷内明央 2008 『松山D遺跡』『石川県埋蔵文化財情報第19号』(財)石川県埋蔵文化財センター



第3図 周辺の遺跡 (S=1/25,000)

遺跡番号	名 称	所 在 地	時 代	種 別	立 地	現 状
記3	法皇山櫻穴古墳	加賀市能登町	古墳後期	横穴墓	山裾	公園(国指定史跡)
06068	吉田原塙跡	加賀市山代町	江戸末	窪跡	丘陵斜面	山林
06069	山代新遺跡	加賀市山代新町	奈良・平安	散布地	平地	田
06070	上野遺跡	加賀市上野町・西島町	奈良・中世	散布地	平地	畠・田・宅地
06212	庄・西島遺跡	加賀市庄・西島・七日市・桑原町	奈良・平安	散布地	平地	田・畠
06213	頃谷櫻穴群	加賀市須賀町	古墳	横穴墓	丘陵斜面	山林
06214	塔尾呂遺跡	加賀市塔尾呂町	縄文・奈良・平安	散布地	平地	田
06215	塔尾呂勝寺跡	加賀市塔尾呂町	中世	寺院跡	丘陵	山林
06216	塔尾呂櫻穴群	加賀市塔尾呂町	古墳	横穴墓	丘陵斜面	墓地
06217	塔尾呂遺跡	加賀市塔尾呂町	縄文・中世	散布地	平地	田・畠
06218	柏野寺跡	加賀市柏野町	南北朝	城跡	丘陵	山林
06219	柏野寺跡	加賀市柏野町	不明	寺院跡	丘陵斜面・平地	山林・畠
06220	柏野中世墓	加賀市柏野町	中世	墳墓	平地	畠
06221	宇谷日遺跡	加賀市宇谷町	平安	散布地	丘陵斜面	山林
06222	小坂遺跡	加賀市小坂町	縄文・奈良・平安	散布地	丘陵	田・畠
06223	秦寺寺跡	加賀市横浜町	不明	寺院跡	平地	田
06224	櫻北櫻穴群	加賀市横浜町	古墳	横穴墓	丘陵斜面	山林
06225	小坂モリアナ遺跡	加賀市小坂町	古墳・中世	散布地	平地	田
06226	櫻北遺跡	加賀市横浜町	縄文後期	散布地	平地	田
06227	上野ヨシコ塙跡	加賀市上野町	不明	窪跡	丘陵斜面	底底
06228	上野古墳群	加賀市上野町	古墳	古墳	丘陵	山林
06229	上野高岡山陣跡	加賀市上野町	安土桃山	陣跡	丘陵	校地
06230	二子塚クマノミヤ遺跡	加賀市二子塚	古墳後期	散布地	平地	田
06231	二子塚東田遺跡	加賀市二子塚町	弥生中期～平安	集落跡	平地	田
06232	風山古墳	加賀市二子塚町	古墳中期	古墳	平地	公園・田
06233	二子塚1～16号塙	加賀市二子塚町	古墳	古墳	平地	田
	二子塚東田1～27号塙	加賀市二子塚町	古墳後期	古墳	平地	田
	二子塚森1号塙	加賀市森町	古墳後期	古墳	平地	畠
06234	西島B遺跡	加賀市西島町	奈良	散布地	平地	田
06235	西島A遺跡	加賀市西島町	平安	集落跡	平地	田
06236	西島C遺跡	加賀市西島町	奈良	散布地	平地	田
06237	津波波魔寺	加賀市桑原町・庄町	奈良	寺院跡	平地	田・宅地
06238	桑原遺跡	加賀市桑原町	古墳	散布地	平地	田
06239	津波舍遺跡	加賀市桑原町	縄文	集落跡	平地	宅地・田
06240	二子塚遺跡	加賀市二子塚町	古墳	散布地	平地	田・畠・宅地・社地
06241	鶴使道跡	加賀市鶴使町・河原町・清水町	弥生・奈良～中世	散布地	平地	田・畠・校地
06242	鶴使道跡	加賀市鶴使町	鍛冶舎・室町	廻跡	平地	山林
06243	字守野ヶ村野1号塙	加賀市字守野	不詳	塙	丘陵	山林
06244	字守野ヶ村野2号塙	加賀市字守野町	不詳	塙	丘陵	山林
06245	字守野ヶ村野A遺跡	加賀市字守野町	縄文	散布地	丘陵	工場用地
06246	字守野ヶ村野B遺跡	加賀市字守野町	不詳	散布地	丘陵	工場用地
06247	字守野ヶ村野ノタ遺跡	加賀市字守野町	不詳	散布地	丘陵	工場用地
06248	法皇山A・B・C・D・E・F・G・H・I・J・K・L・M・N・O・P・Q・R・S・T・U・V・W・X・Y・Z号櫻穴	加賀市鶴使町	古墳後期	横穴墓	山麓	史跡公園
06249	字守野穴羣葬	加賀市字守野町	古墳	横穴墓	丘陵斜面	山林
06250	音谷漢法寺跡	加賀市栄谷町	不詳	寺院跡	平地	畠
06251	字守野遺跡	加賀市栄谷町	奈良・平安	散布地	丘陵斜面・平地	畠
06252	栄谷A遺跡	加賀市栄谷町	奈良・平安	散布地	平地	畠・田
06253	栄谷丸山1～12号櫻穴	加賀市栄谷町	古墳後期	横穴墓	山腹	山林
06254	榮谷山山神社遺跡	加賀市栄谷町	奈良・平安	散布地	丘陵斜面	社地
06255	栄谷宮の古墳	加賀市栄谷町	古墳	古墳	丘陵斜面	社地
06256	栄谷A遺跡	加賀市栄谷町	奈良・平安	散布地	平地	畠・定地
06258	分校1～7号塙	加賀市分校町	古墳	古墳	丘陵	山林
06259	分校2丁・下山古墳	加賀市分校町	古墳	古墳	丘陵	山林
06260	分校1～5号窪跡	加賀市分校町	古墳	窪跡	丘陵斜面	山林
06261	松山東1～4号塙	加賀市松山町	古墳	古墳	丘陵	山林
06263	松山城跡	加賀市松山町	南北朝	城跡	丘陵	山林・畠
06264	松山A遺跡	加賀市松山町	古墳	散布地	丘陵	山林
06265	松山櫻穴	加賀市松山町	古墳	横穴墓	丘陵斜面	山林
06266	松山A遺跡	加賀市松山町	古墳	散布地	丘陵	畠・山林
06267	松山櫻窪跡	加賀市松山町	古墳前開	散布地	丘陵	畠・山林
06268	分校1～5号窪跡	加賀市松山町	古墳	窪跡	丘陵斜面	山林
06269	分校チャカ山1～18号塙	加賀市分校町	古墳前期	古墳	丘陵	山林
06270	分校チャカ山1～3号塙	加賀市分校町	古墳後期	古墳	丘陵斜面	山林
06270	分校カン山1～9号塙	加賀市分校町	古墳前期	古墳	丘陵	山林
06271	分校山王古墳群	加賀市分校町	古墳	古墳	平地	田
06274	分校遺跡	加賀市分校町	平安	散布地	平地	田
06275	楓井遺跡	加賀市楓井町	古墳～平安	散布地	平地	田
06287	手見屋敷跡	加賀市庄町	不詳	廻跡	平地	田
03058	那谷金比羅山古墳	小松市那谷町	古墳	古墳	丘陵	畠
03059	那谷金比羅山奈良跡群	小松市那谷町	古墳後期	窪跡	丘陵	田・荒地
03061	那谷桃の木山窪跡	小松市那谷町	奈良初期	窪跡	丘陵	荒地

第1表 周辺の遺跡

第3章 第1次調査の結果

第1節 概要

第1次調査区は第2次調査区の南西側に位置し、幅約10m、長さ約30m、面積300m²である。地表面は標高約30m、遺構検出面は標高約29mを測る。

調査区は第1章第2節で記したように、1～3区に区切り、1区→3区→2区の順に調査を行った。

調査着手以前、1区は宅地、2区は道路・水路、3区は水田であり、調査区北東に沿っては幅約1mの水量豊富な水路が流れている。調査区域はこれらにより搅乱される箇所が多く認められたが、比較的遺存状況の良い調査区南西壁断面Aにより堆積土層を示すと、第1層：宅地盛土が5cm、第2層：旧表土が10cm、第3層：暗黄褐色粘質土（しまりあり）が20cm、第4層：褐色シルト質土（3～15cm大の自然礫を多く含む、しまり甘い）が40～50cm、遺構覆土は第5層：灰褐色シルト質（3～15cm大の自然礫含む）であり、遺構覆土には他に褐色粘質土や暗褐色粘質土等が認められる。ベース土はA：湯黃褐色粗砂（3～15cm大の自然礫含む）である。遺物包含層とできるものは認められない。自然礫を含む第4層や第5層からは、調査地一帯が遺跡の営まれた中世以降、洪水等とともにう土石流により広範に覆われた状況が窺われる。

遺構は主に遺物を出土したものに番号を付けた。土坑（SK）1～7、ピット（P）1～9である。そのうち、SK4は井戸（SE1）に、SK7は溝（SD1）と呼称を変更している。掘立柱建物（SB）は3棟を示したが、SK2やSK5の周辺では柱穴とみられるピットがいくつか存在しており、棟数はさらに多いものとみられる。

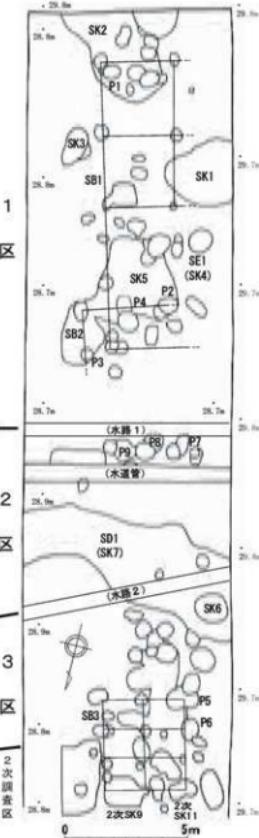
遺物は主に遺構から出土し、室町～戦国時代の土師器30点、陶器8点、磁器3点、漆器1点、石製品3点、鉄製品1点、焼土塊8点を数える。

第2節 検出遺構・遺物

S B 1 掘立柱建物（第5・7図）

1区に位置する4×2間以上（11.7×3.3m以上）、N-15°-W。調査区南西側に延びる総柱建物とみられ、内部にSK1あるいはSK5をともなう可能性がある。

S B 2 掘立柱建物（第5・7図）



第4図 調査区全体図 (S=1/200)

1区に位置する。1×2間以上（2×36m以上）、N-16°-Wを示したが、搅乱を受けているSB2北西側や、2区南東側に分布するP7～9他のピットを考慮すると、プランが変わる可能性もある。P2からは土師器皿小片が出土。P3からは14の土師器皿、15の珠洲焼すり鉢が出土している。P4からは16の越前焼甕が出土している。

SB3 堀立柱建物（第6・7・21図）

3区から第2次調査区南東端にかかり位置する。3×2間以上（3.9×3.5m以上）、N-14°-Wの総柱建物を示したが調査区外へさらに延びる可能性もある。第1次調査区で南東半部が、第2次調査区で北西半部が検出された。遺物はP5からは土師器皿、越前焼甕片のほか、スサを含んだ焼土片が出土地している。P6からは17の金属製品、SK11からは1（第21図）の土師器皿と2（第21図）の銅鏡が出土している。

SE1（SK4） 井戸（第5・8図）

1区に位置する。検出面で長径約1m、短径86cmの円形を呈する素掘り井戸。覆土はしまりの甘い暗褐色粘質土（4層）であり、検出面より約1.2m掘削したが崩落のおそれがあるためここで止めた。SK5出土品と接合した8の土師器皿、7の石製行火が出土している。

SK1 土坑（第5・8図）

1区南東壁に接し位置し、SB1の内部施設の可能性がある。長辺2.8m以上、短辺2.5m、深さ10cmの浅い不整枠円形土坑。覆土は褐色粘質土であり、1の土師器皿は16世紀代か、2の加賀焼甕は14世紀前半のユノカミダニ窯産とみられる。ほかに3の石製行火が出土している。

SK2 土坑（第5・8図）

1区に南東端に位置する。長さ3.8m以上、幅約2.6m、深さ20cm前後の不整枠円形土坑。SB1と一部重複するほか、内部には柱穴とみられるピットが存在し、堀立柱建物の内部施設の可能性がある。礎を含む暗褐色粘質土（8層）を覆土とし、底面には黒褐色粘質土（10層）、土坑内部東側には底面に最大厚8cmで黄白色粘質土（9層）を貼る。4の瀬戸美濃天目碗は15世紀末以降に比定される。ほか13～14世紀代の土師器皿片が出土している。内部のP1からは5の14世紀前半代の土師器皿が出土している。

SK3 土坑（第5・8図）

1区に位置する。長辺約1.6m、短辺約1.1m、深さ16cmの不整枠円形土坑。褐色粘質土を覆土とし、6の肉厚の土師器皿が出土している。

SK5 土坑（第5・8図）

1区に位置する。長辺約3.2m、短辺約2.6m、深さ15cmの略長方形土坑。覆土は褐色粘質土（2層）を主体とし、SK2と同じく底面には黄白色粘質土（3層）が最大厚8cmで貼られる。SB1に重複しその内部施設とみるが、他の建物に付随する可能性もある。8の15世紀代の土師器皿、9の15～16世紀代の青磁碗、10の越前焼すり鉢、11の自然碟を用いた砥石が出土している。

SK6 土坑（第5・8図）

3区に位置する。SD1内部に位置し、溝内部の深みの可能性がある。遺物は出土していない。

SD1（SK7） 溝（第5図）

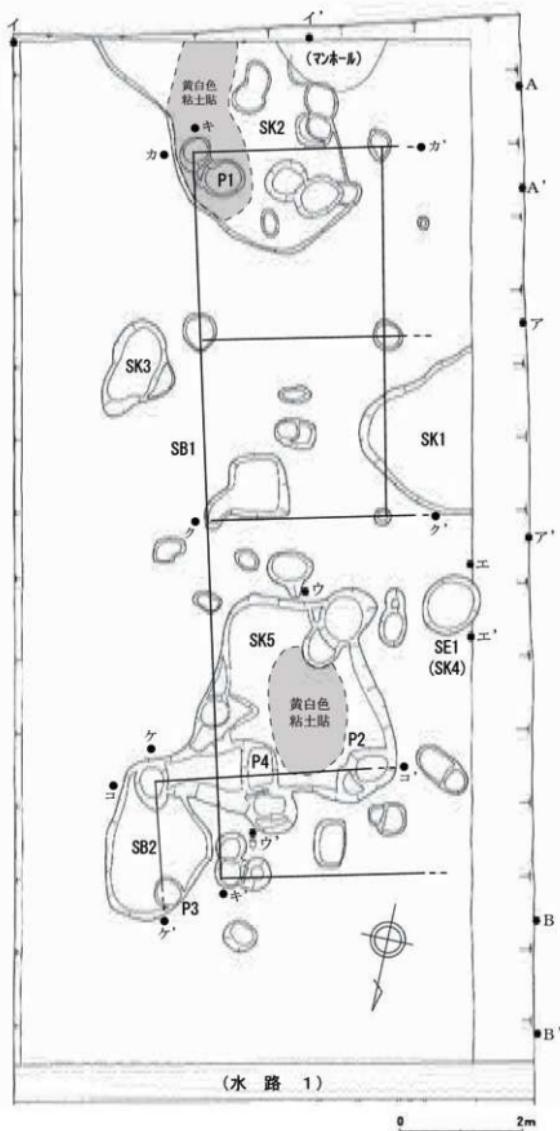
2・3区に位置する。幅2～3.5m、底面は凹凸が多く東側で深さ約18cm、西側で深さ約30cm、東から西に向け深みを増す。覆土には自然碟を多く含む。12の14世紀後半～15世紀代に位置付けられる中国製青磁碗、内面に朱漆で扇文様を描く13の漆塗有台椀のほか、加賀焼甕、土師器片が出土している。

その他の遺構・遺物（第6図）

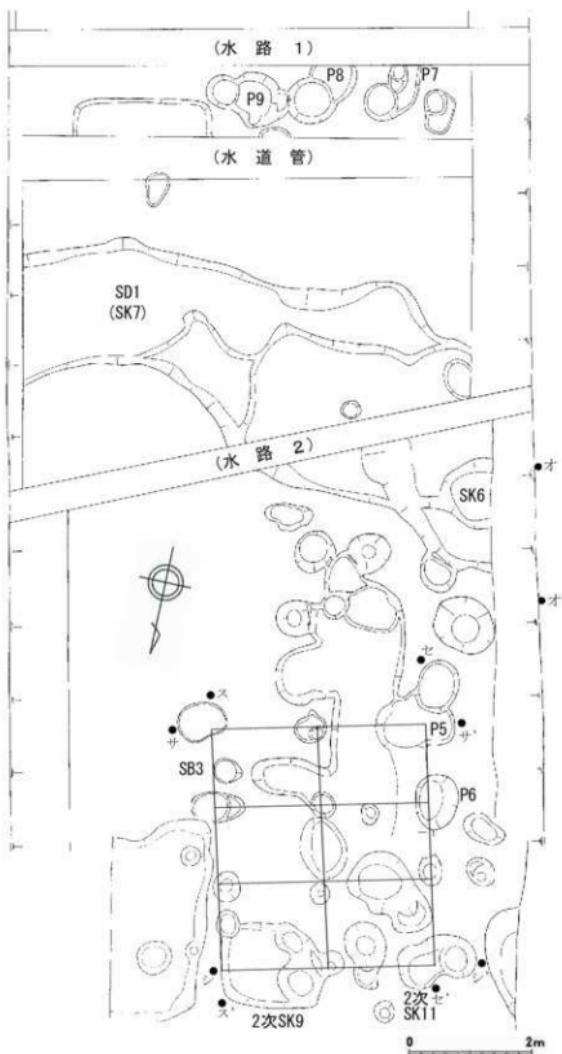
2区南西隅には柱穴とみられるピットが分布した。P 7からは18の土師器皿が、P 8からは19の14世紀代の青磁碗、20の土師器皿が、P 9からは21の越前焼すり鉢が出土している。1区検出面からは22の土師器皿が、2区西隅では23の瀬戸美濃平碗が出土している。

報告番号	出土地点	種類 器種	口径(cm) 底径(cm) 重さ(g)	色調(内) 色調(外)	胎土			焼成 並	調整(内) ヨコナリ	調整(外) ヨコナリ	口 底 厚さ(cm)	備考	国化 番号
					赤 3-38 3-38 3-38	白 3-38 3-38 3-38	黒 3-38 3-38 3-38						
1 SK1	土師器 皿		7.5 5.4	純黄柾 純黄柾	微 並	無 ヨコナリ	無 ヨコナリ		3 3		3		D4
2 SK1	加賀燒 甕			灰黃柾 純黃柾	並	小 ヨコナリ	微 ヨコナリ						D5
3 SK1	石製品 行火 幅	長(182) 幅(102)	厚2.6										右2
4 SK2	瀬戸美濃 天目碗		12.3	素地、灰白 輪、鉄柾				並			2		D8
5 SK2 内 P1	土師器 皿			灰白	微 並	無 ヨコナリ	無 ヨコナリ						D7
6 SK3	土師器 皿		(1.7)	純黄柾 純黄柾	並 並	無 ヨコナリ	無 ヨコナリ	並	ヨコナリ ヨコナリ	小片			D9
7 SE1 (SK4)	石製品 行火 幅	長(135) 幅(92)	厚2.7										右3
8 SK4・5	土師器 皿	9 8	1.6 橙色		微 並	無 ヨコナリ	無 ヨコナリ		3 4				D6
9 SK5	青磁 碗	11.6	素地、白 輪、青磁										D11
10 SK5	越前焼 すり鉢			純黄柾 純柾	並	小 ヨコナリ	小 ヨコナリ	並	回転ナリ 回転ナリ	切口 切口	2		D10
11 SK5	石製品 砾石	長15.5 幅13.7	厚3.5 8144										右1
12 SD1 (SK7)	青磁 碗			素地、白 輪、青磁									D13
13 SD1 (SK7)	漆塗木製品 有台板												木1
14 P3 (SB2)	土師器 皿			純柾 純柾	並	無 ヨコナリ	無 ヨコナリ	並	ヨコナリ ヨコナリ	小片 小片			D18
15 P3 (SB2)	珠洲焼 すり鉢		18	灰 灰	並	並	無	並	ヨコナリ ヨコナリ	切口 切口	3	切口 11条	D2
16 P4 (SB2)	越前焼 甕			純柾 純柾	多	並	無	並	ヨコナリ ヨコナリ	指付 指付			D1
17 P6 (SB3)	金属製品 不明	長(39) 幅(12)	厚0.3 (3.5)										金1
18 P7	土師器 土師皿		7.0	柾 柾	微 並	無 ヨコナリ	無 ヨコナリ		ヨコナリ ヨコナリ				D12
19 P8	青磁 碗	(13.4)		素地、灰 輪、19-7灰	小 並	無 ヨコナリ	無 ヨコナリ						D14
20 P8	土師器 皿	(10.7)		純柾 純柾	微 並	無 ヨコナリ	無 ヨコナリ	並	ヨコナリ ヨコナリ	?	1		D16
21 P9	越前焼 すり鉢		18	柾 純柾	並	並	微 ヨコナリ	並	回転ナリ 回転ナリ	切口 切口	2		D3
22 1区検出面	土師器 皿			浅黄柾 浅黄柾	並	無 ヨコナリ	無 ヨコナリ	並	ヨコナリ ヨコナリ	小片 小片			D15
23 2区西隅	瀬戸美濃 平碗			素地、黄柾 輪、14-7黄	並	無 ヨコナリ	無 ヨコナリ						D17

第2表 出土遺物観察表

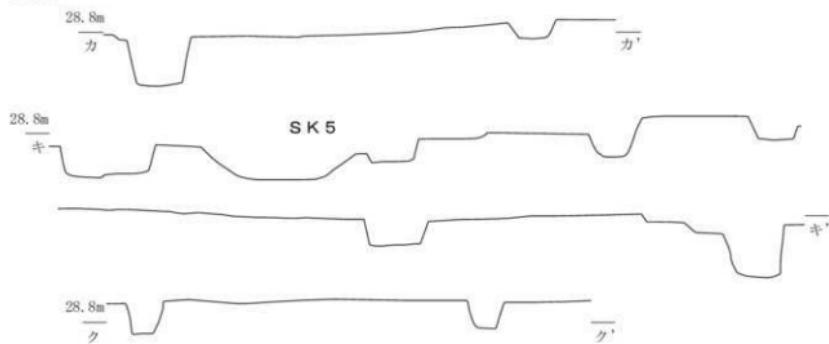


第5図 遺構平面図 (1区 S=1/80)

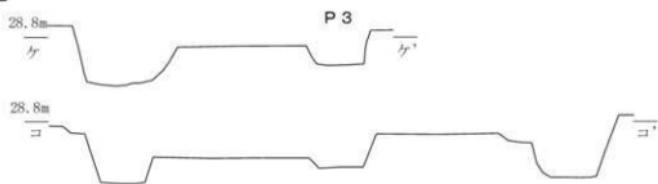


第6図 造構平面図 (2・3区 S=1/80)

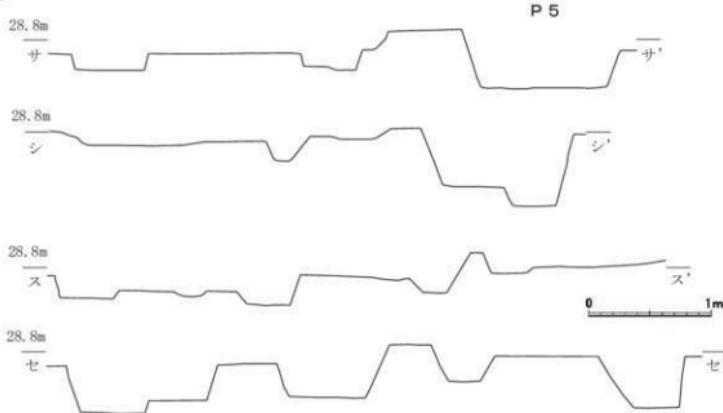
S B 1



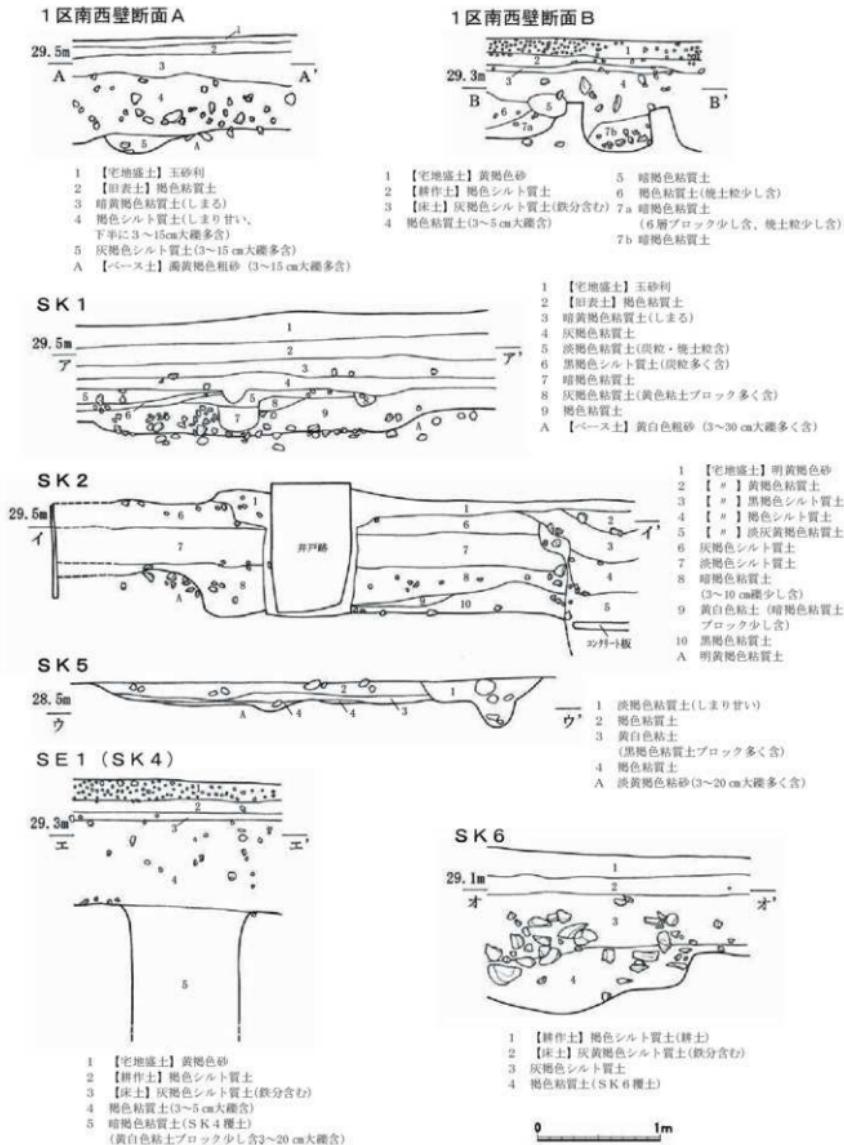
S B 2



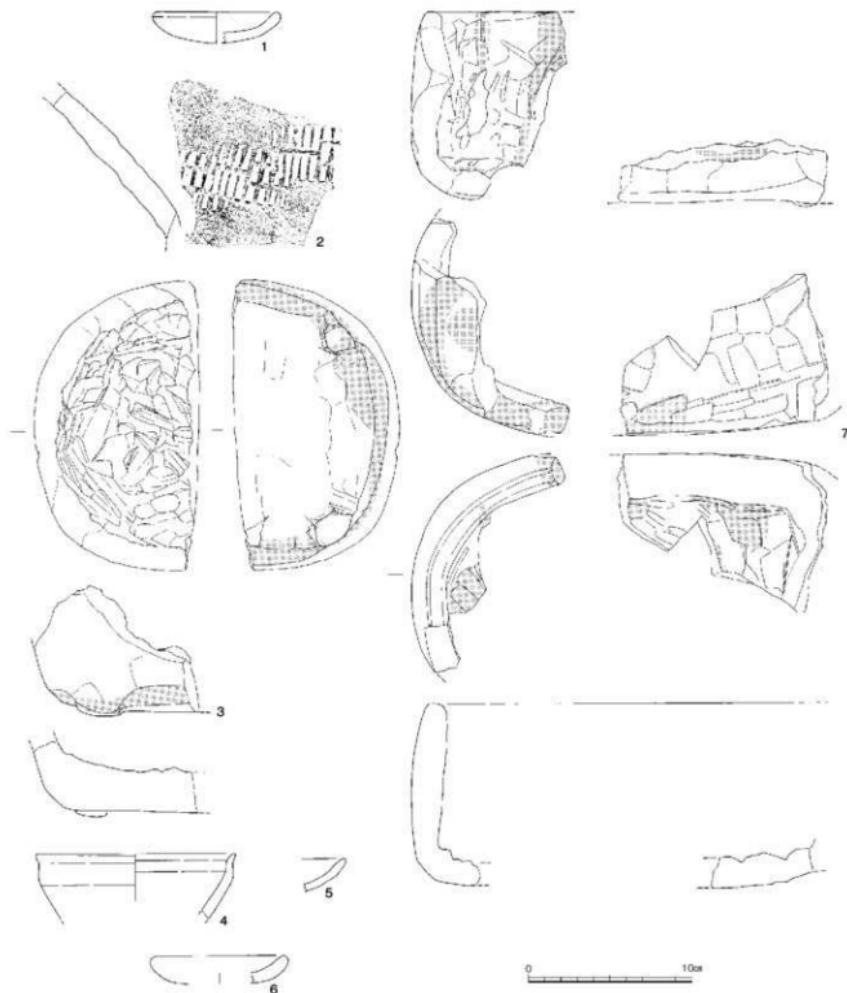
S B 3



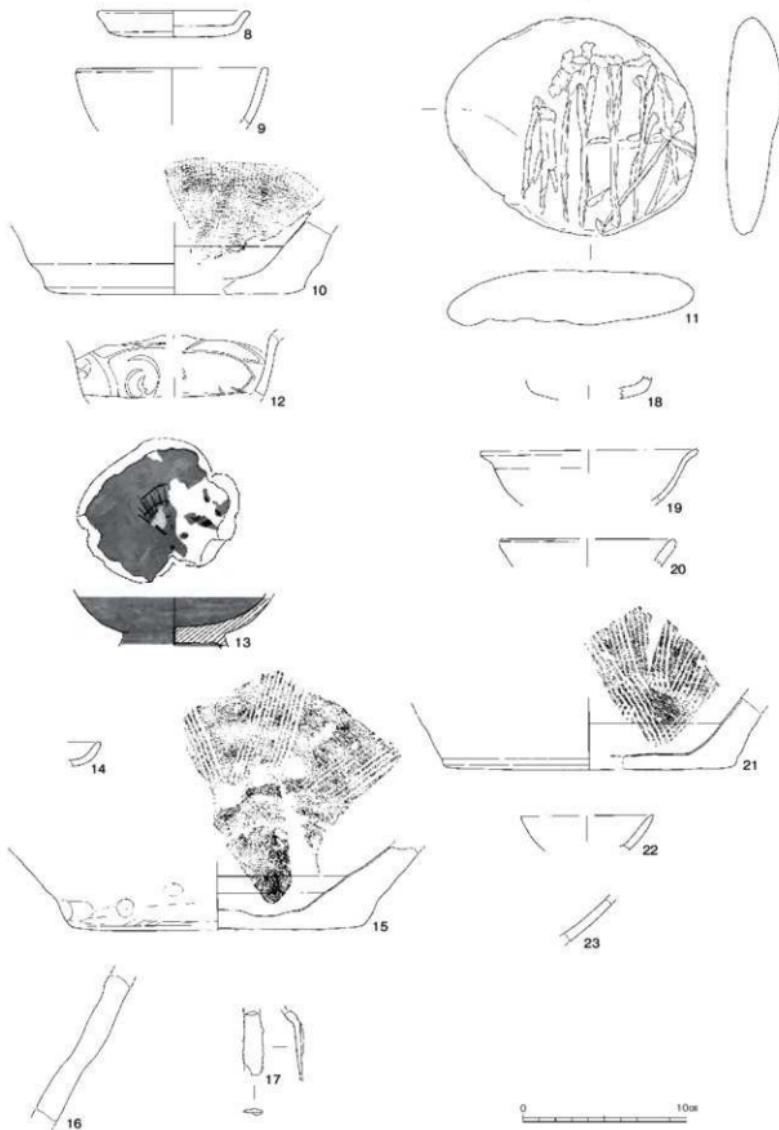
第7図 造構断面図 (S B S=1/40)



第8図 調査区壁・造構断面図 (SE・SK S=1/40)



第9図 出土遺物実測図1 (S=1/3)



第10図 出土遺物実測図2 (S=1/3)

第4章 第2次調査の結果

第1節 概要 (第11図)

第2次調査区は第1次調査区の北側に位置し、南端幅約10m、北端幅約5m、延長約55mを測り、面積は450m²である。調査地の道路計画前の状況は水田及びJA敷地等にあたり、地表面の標高は約30mである。

遺構検出面は南から北に向かって緩やかに傾斜し、その標高は南端で28.7m、北端で28.0mを測る。

調査区の区割りは、道路線形を基に道路測点No.25(No.25点の西端から4m東側の点)を起点として、北側へ10m毎のグリッドを設定し、1~6区(第2次)と呼称した。

層序は基本的には、第1次調査区と同様とみられ、1区のベース面は、黄褐色粗砂(礫多量混入)であるが、2区間では1区以南でみられた黄褐色粗砂の上層に黄茶褐色砂質土の堆積が確認され、これがベースとなるものであり、3区以北は再び礫を多量に含む黄褐色粗砂である。

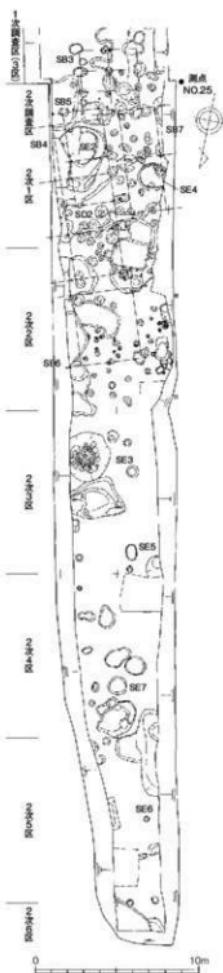
遺構は第1次調査区から北側の第2次調査区に延びてくる掘立柱建物(SB3)の柱穴を含めた掘立柱建物、井戸、土坑、溝、小穴等を検出し、土師器、須恵器、陶磁器、銅錢、石製品、輪の羽口、鉄滓が出土した。

遺構番号は第1次調査同様に引き続き連番にて付けたもので、SB(掘立柱建物)4~7、SK(井戸・土坑)8~30であるが、今回の報告に整理して、井戸はSEと呼称を変更した。SD(溝)2、P(柱穴・小穴)10~21、SX(落ち込み)1である。

第2節 検出遺構・遺物

S B 4 掘立柱建物 (第12・14・21図)

2次1・2区に位置する。桁間3間(9.6m)×梁間1間(3.0m)以上で、調査区東外に延びる総柱建物と想定される。主軸はN=20°-Wを指し、柱間は桁間2.8~3.4m、梁間3.0mを測る。柱穴の形状は円形ないし梢円形を呈し、径0.6~1.5m、検出面からの深さ0.2~0.7mを測る。SB5との前後関係は不明である。柱穴のP17の底部には本来は円形であったものが欠損し柱穴に利用されたと思われる3の石が据えられており土師器皿片が出土した。3は表面に敲打痕がみられることや後述するように鍛冶関連遺物等の出土状況からみてかつて鉄床石として利用



第11図 第2次調査区全体図(S=1/300)

されていたものが転用された可能性が高いと思われる。P 19 では同様に柱の周囲に石を据えたものとして4の石臼、5の敲石が出土した。4は外形状からして16世紀代の粉挽き臼の下臼とみられるが、その上面がかなり凹んでいることから、穀類以外の比較的堅い物を挽いた可能性が考えられる。

S B 5 据立柱建物（第12・14図）

2次1区に位置する。桁間2間（5.8m）×梁間1間（2.4m）以上で、調査区東外に延びる総柱建物と想定される。主軸はN-20°-Wを指し、柱間は桁間2.6、3.2m、梁間2.4mを測る。柱穴の形状は円形ないし楕円形を呈し、径0.3～0.6m、検出面からの深さ0.2～0.4mを測る。S B 4との前後関係は不明である。

S B 6 据立柱建物（第12・14図）

2次2区に位置する。桁間1間（4.4m）×梁間1間（3.7m）以上で、調査区東外に延びる建物と想定される。主軸はN-20°-Wを指し、柱穴の形状は円形ないし楕円形を呈し、径0.7～1.0m、検出面からの深さ0.2～0.5mを測る。S B 4と軸を同じくすることから、これに付随した建物と想定される。

S B 7 据立柱建物（第12・14・21図）

2次1区に位置する。桁間2間（6.4m）×梁間1間（2.2m）以上で、調査区西外に延びる総柱建物と想定される。主軸はN-20°-Wを指し、柱間は桁間3.0、3.4m、梁間2.2mを測る。柱穴の形状は円形ないし楕円形を呈し、径0.5～1.7m、検出面からの深さ0.2～0.6mを測る。柱穴のP 14より6の加賀焼甕が出土した他、P 10・11・13、S K 15より土器器皿片を確認した。

S E 2 (S K 10) 井戸（第12・15・21図）

2次1区に位置する。長径2.7m、短径2.3m、深さ2.2mを測る平面形が楕円形を呈する素掘り井戸。北側は長辺1.7m、深さ0.9mを測る土坑に切られている。埋土は東西セクションで8層確認されており、遺物は7・8の15世紀後半代の越前焼すり鉢の他、珠洲焼・加賀焼甕片、青磁碗片、瓦質土器片が出土した。この他にS E 4 (S K 16) 出土品と接合した9の陶器の鉢と10の石臼が出土しているが、10はその外形状において縁幅が狭く側面が垂直化している様相から17世紀後半～18世紀に位置付けられると考えられ、いずれも混入品の可能性が高いと思われる。また、北側の土坑からは11の越前焼の甕が出土した。

S E 3 (S K 13) 井戸（第12・16・22図）

2次3区に位置する。上径1.2m、下径0.6m、深さ2mを測る平面形が円形を呈する石組み井戸。底部は暗灰色砂礫層で湧水が認められ、立ち上がりは上部に向かって緩やかに拡がりをもつものである。長さ10～40cm程度の自然石を使用しており、最上部には大型のものを配置し、その下方は横長の石を横方向に要所において設置し、その上下に方形もしくは円礫の端面を内側に向けて積み上げている。ただし、東西隅においては横長の石を縱方向に設置している状況も看取される。また内側の石組みの隙間には粘土を詰め補強していることが確認された。掘方は上径3.2m、下径1.7m、深さ2mを測るもので、その埋土にあたる7層が上層（a）と下層（b）に分層されることから、この境辺りまで一旦石積みした後、裏込め土を入れたものと推察される。井戸側内の埋土は3層認められ、遺物は12の14世紀代の土器器皿、13の珠洲焼すり鉢、14の16世紀代の越前焼甕等が出土している。

S E 4 (S K 16) 井戸（第12・17・22図）

2次1区に位置する。径1.7m、深さ2mを測る平面形が円形を呈する石組み井戸。石組みは南西隅で底部より上部へ向け高さ0.6mが遺存していた程度である。掘方は明確には認識できなかつたが、径2.2mを測るもので、その埋土（裏込め土）は暗褐色粘質土で10cm前後や3～5cm前後の礫を含

むものである。井戸側内の埋土は暗褐色粘質土で2層に分かれる。遺物は15～17の越前焼すり鉢、18・19の越前焼甕、20の13～14世紀前半の加賀焼甕、21・22の備前焼甕の他、鉄滓等が出土している。時期的には16世紀後半～末頃が中心と思われる。

S E 5 (SK 25) 井戸 (第12・17・23図)

2次3区に位置する。上径1.2m、下径0.6m、深さ1.7mを測る平面形が円形を呈する素掘り井戸。北側は旧建物の基礎コンクリートにより一部損壊しており、西側は調査区外に延びていく。埋土は暗褐色粘質土(礫多量混入)の単層で、23の土師器皿と24の珠洲焼すり鉢が出土している。

S E 6 (SK 27) 井戸 (第12・13・18図)

2次4・5区に位置する。径1.2m、深さ1.8mを測る平面形が円形を呈する素掘り井戸。西側は調査区外に延びていく。掘方は幅1.7mを認める。井戸側内埋土は暗褐色粘質土を主体として3層に分かれる。また、この井戸の外周には南北5.3m、東西1.3m以上、深さ0.25mを測る平面形が略方形を呈する土坑がみられる。この土坑はS E 6 (SK 27)に切られるが、東側の南北1.8m、東西1.3m以上、深さ0.1mを測る平面形が略方形を呈する土坑を切っている。出土遺物は越前焼すり鉢片が確認された。

S E 7 (SK 28) 井戸 (第12・18図)

2次4区に位置する。径1.2m、深さ1.7mを測る平面形が円形を呈する素掘り井戸。埋土は暗褐色粘質土で、遺物は確認されなかった。

S K 8 土坑 (第12・19・23図)

2次1区に位置する。長辺3.3m、短辺1.7m以上でさらに北東に延びるものと推測され、深さ0.1～0.2mを測る。平面形は隅丸長方形を呈する土坑で、埋土は3層に分けられ暗褐色粘質土が主体である。また内部には、2箇所において小穴を確認し、北側に位置するものは径0.6m、深さ0.4m、埋土は暗褐色粘質土を基調とする2層を認め、南側に位置するものは径0.35m、深さ0.1mを測り、埋土は暗褐色粘質土の単層である。遺物は25・26の土師器皿等が出土している。

S K 12 土坑 (第12・19・23図)

2次1区に位置する。径1m、深さ0.7mを測る平面形が円形を呈すると想定されるもので、埋土は暗褐色粘質土を基調とし3層に分かれ、西側の小穴を切っている。27の13世紀中～後半の加賀焼の短頭小型甕や28の土師器皿、29の15世紀後半以降の青磁碗が出土している。

S K 18 土坑 (第12図)

2次2区に位置する。辺2m×2m以上、深さ0.1mを測る平面形が略方形を呈すると想定されるもので、北東側の調査区外に延長するものである。埋土は暗褐色粘質土の単層で、土師器皿片、SD2出土品との接合する白磁片等が出土している。

S K 19・22 土坑 (第12図)

2次2区に位置する。SK 22は西端の長径1.7m、短径0.9m、深さ0.1mを測る平面形が楕円形を呈するのもので、SK 19はその東側の長辺2m以上、短辺1.4m、深さ0.1mを測る平面形が略長方形を呈するのもので、両者の前後関係は不明である。SK 19は東側でSK 18等に切られる。埋土はともに暗褐色粘質土の単層で、SK 19より青磁盤片・土師器皿片・鉄滓、SK 22より土師器片・鉄滓の出土を認める。掘立柱建物SB 6に内包される可能性が高いと思われる。

S K 20 土坑 (第12図)

2次2区に位置する。辺2.5m×2m以上で北東調査区外に延び、深さ0.26mを測る平面形が不整形を呈する土坑である。また内側中央には掘立柱建物SB 4の柱穴が認められる。埋土は暗褐色粘

質土の単層で、珠洲焼片や鉄滓を少量認める。

S K 21 土坑（第12・16・23図）

2次3区に位置する。長辺3.3m以上、短辺2.4m、深さ0.6mを測り、中心に向かって深くなる状況で、平面形が不整形を呈する土坑である。東側は調査区外に及び、南側でS E 3（SK 13）に切られる。埋土は暗褐色粘質土を主体に2層確認され、30の加賀焼すり鉢が出土した。

S K 23 土坑（第12・23図）

2次4区に位置する。長辺2.7m、短辺2.2m、深さ0.2mを測る平面形が不整橈円形を呈する土坑である。埋土は暗褐色粘質土の単層で、31の土師器皿等が出土した。

S K 24 土坑（第12・20・23図）

2次1・2区に位置する。長辺4.6m、短辺2.6m以上、深さ0.3mを測る平面形が隅丸長方形を呈する土坑である。比較的壁の立ち上がりはしっかりしている。S B 4柱穴P 17・19が切っている可能性が高いと思われる。埋土は主に暗褐色粘質土であるが、部分的に底面は黄褐色粘質土を確認しており、その上面の中央部西壁際付近において礫の集中範囲を検出している。遺物は32の土師器皿、33の青磁碗、34の石臼の他、SK 17出土品と接合する越前焼壺片等を確認している。34の石臼は粉挽き臼の上臼で、目は切線状に主溝のついた型式で15世紀後半代にあたる。

S K 26 土坑（第12・20図）

2次4区に位置する。径1.2～1.3m、深さ1mを測る平面形が円形を呈する土坑。埋土は暗褐色粘質土の単層で、越前焼壺片が出土した。

S K 29 土坑（第12・19・23図）

2次2区に位置する。長辺1.4m、短辺0.8m、深さ0.8mを測る平面形が略長方形を呈する土坑である。埋土の上層は暗褐色粘質土（1層）であるが、その直下の壁から底面において厚さ0.1mの鉄滓塊が確認され、35の土師器皿、36の青磁皿、37・38の輪の羽口の他、固化した39の鉄滓を含め比較的多量の鉄滓が出土しており、鍛冶関連の遺構の可能性が考えられる。

S K 30 土坑（第12・13・23図）

2次2区に位置する。長辺1.1m、短辺0.5m以上で調査区西外に及び、深さは北側に向け落ち込むもので約0.8mを測る平面形が略長方形を呈する土坑である。埋土は暗褐色粘質土（6層）と淡褐色粘質土（13層）を認め、出土遺物は40の二次被熱がみられる越前焼すり鉢と41の鉄滓がある。

S D 2（2次SD 1）溝（第12・24図）

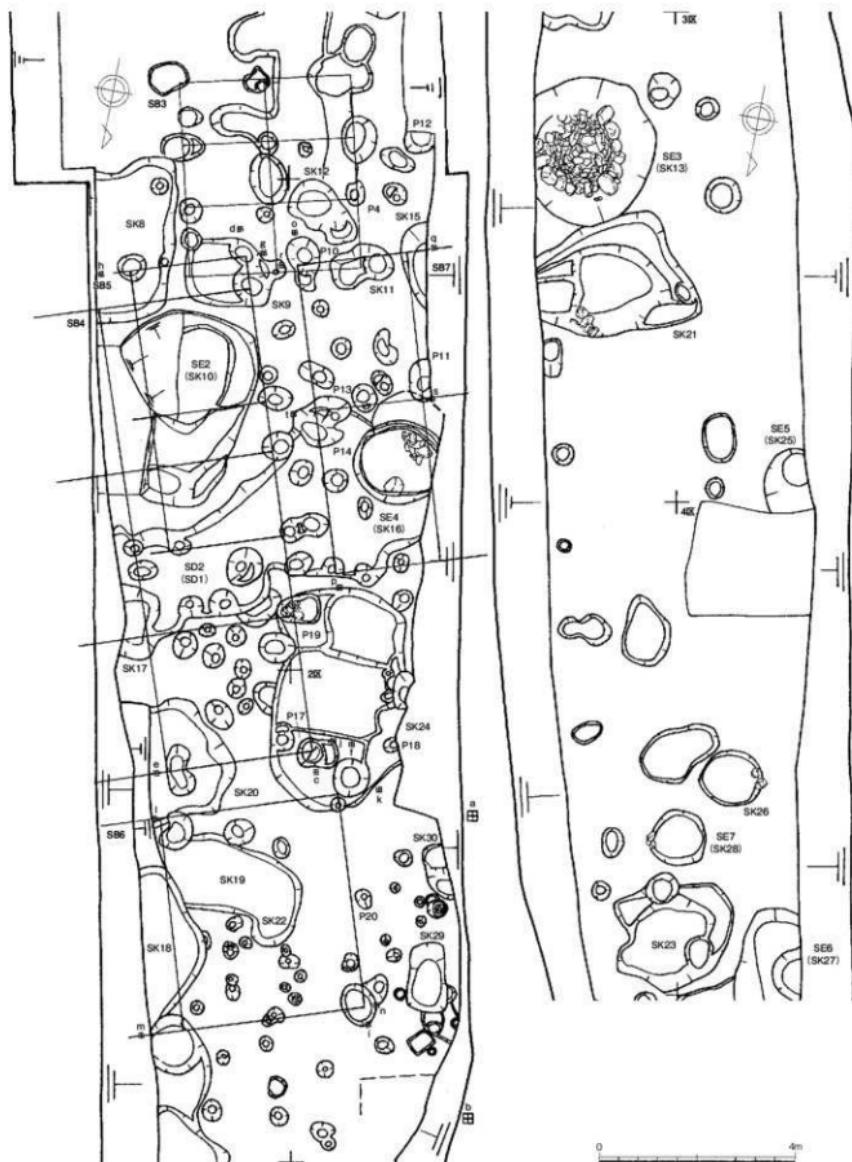
2次1区に位置する。現地調査時はSD 1と呼称していたが、1次調査との整合によりSD 2と変更となった。南西から北東方向に走り、上幅は2～3.2m、深さは0.2～0.3mを測る溝。42・43の土師器皿が出土した他、SK 18出土品と接合する白磁片が認められる。

S X 1 落ち込み（第13図）

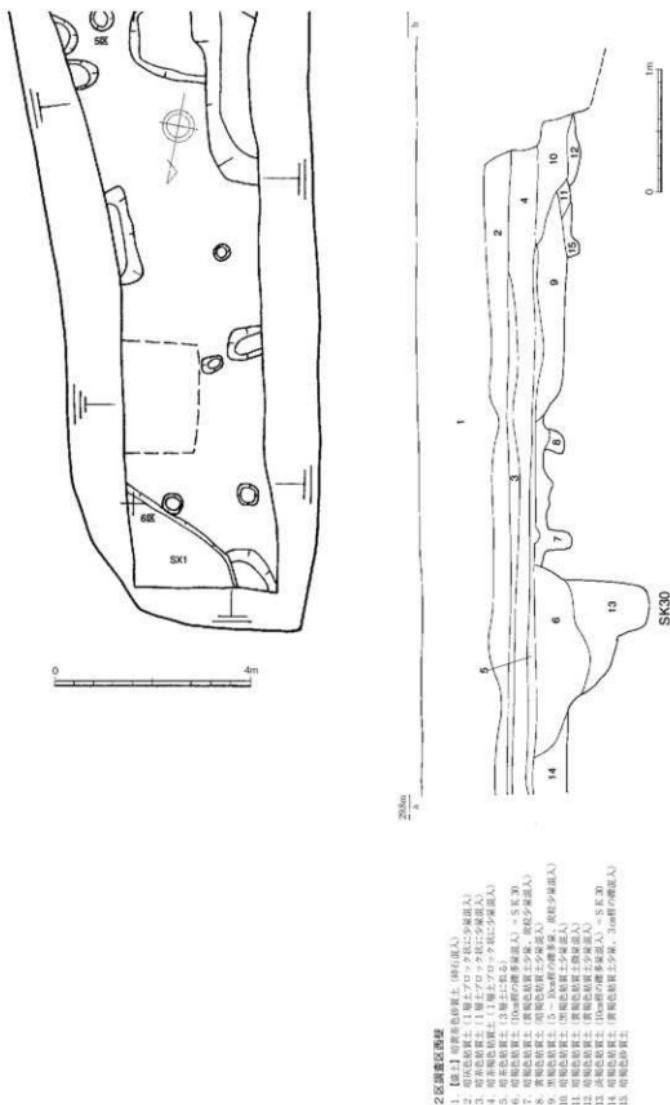
2次6区に位置する。調査区の北端で北側に向かって落ち込むもので、深さ0.1～0.2mを測る。越前焼すり鉢片が出土している。北側に落ち込んでいく南端部分にあたる可能性が考えられる。

その他の出土遺物（第24図）

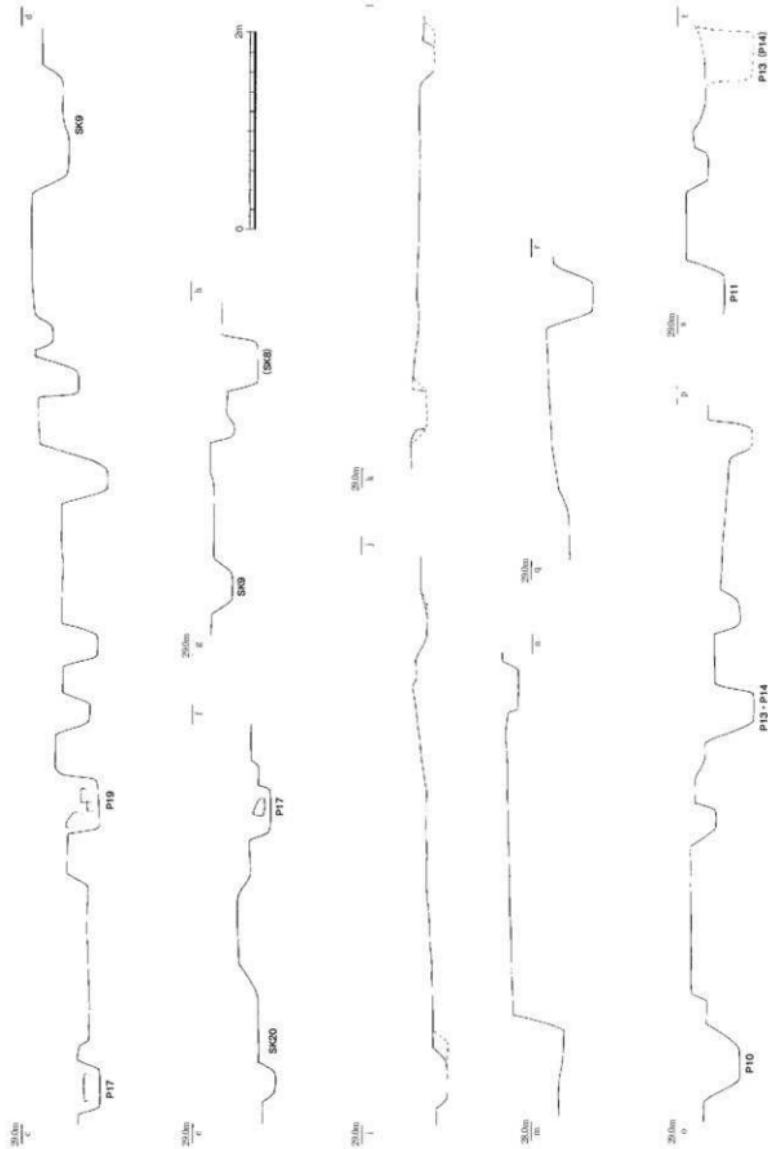
その他検出面等からの出土遺物としては、1区遺構検出面から45の16世紀の白磁皿、2区遺構検出面から46・47の土師器皿、6区遺構検出面から48の越前焼すり鉢、調査区排土から49の瀬戸美濃焼瓶子が出土した。



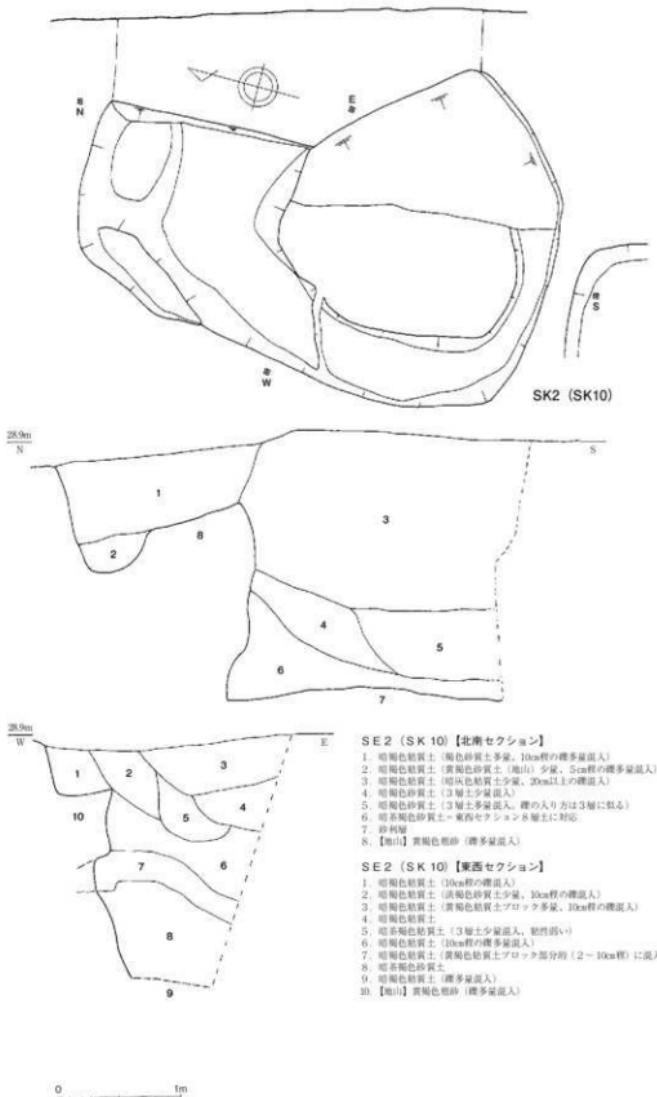
第12図 第2次調査遺構平面図1 (S=1/100)



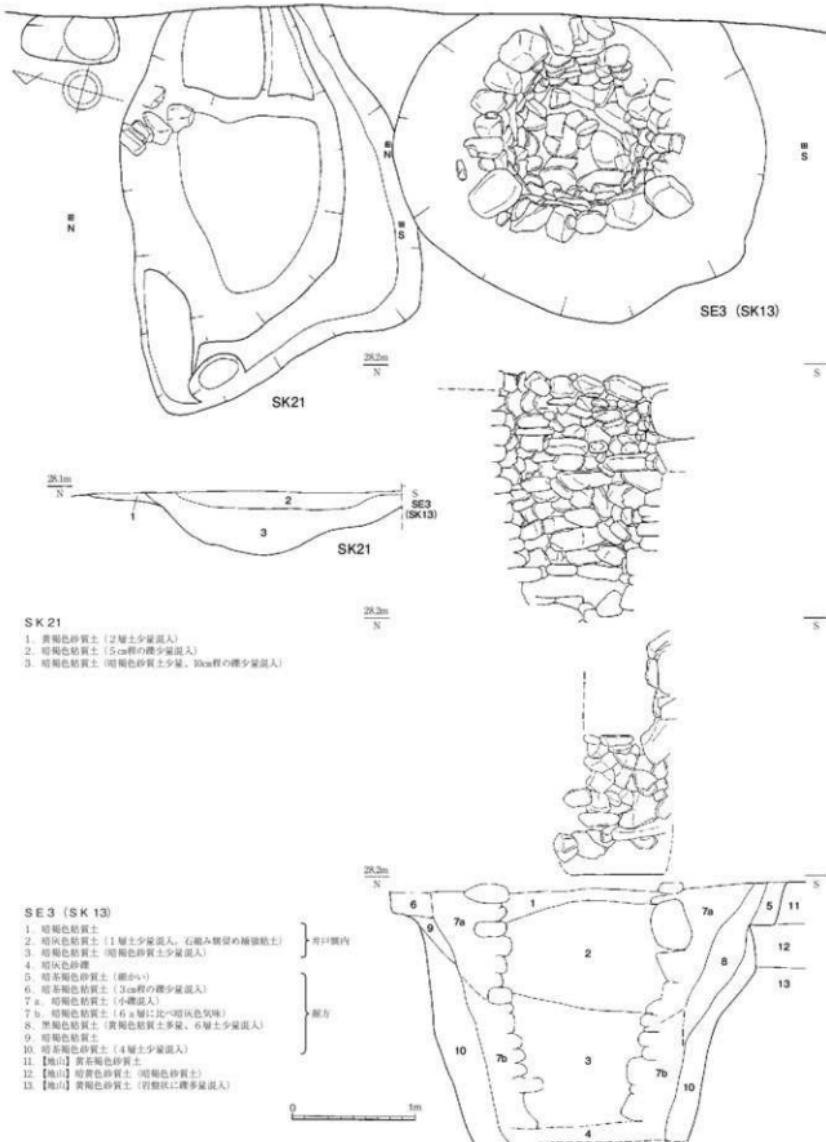
第13図 第2次調査遺構平面図2・断面図1(S=1/100-40)



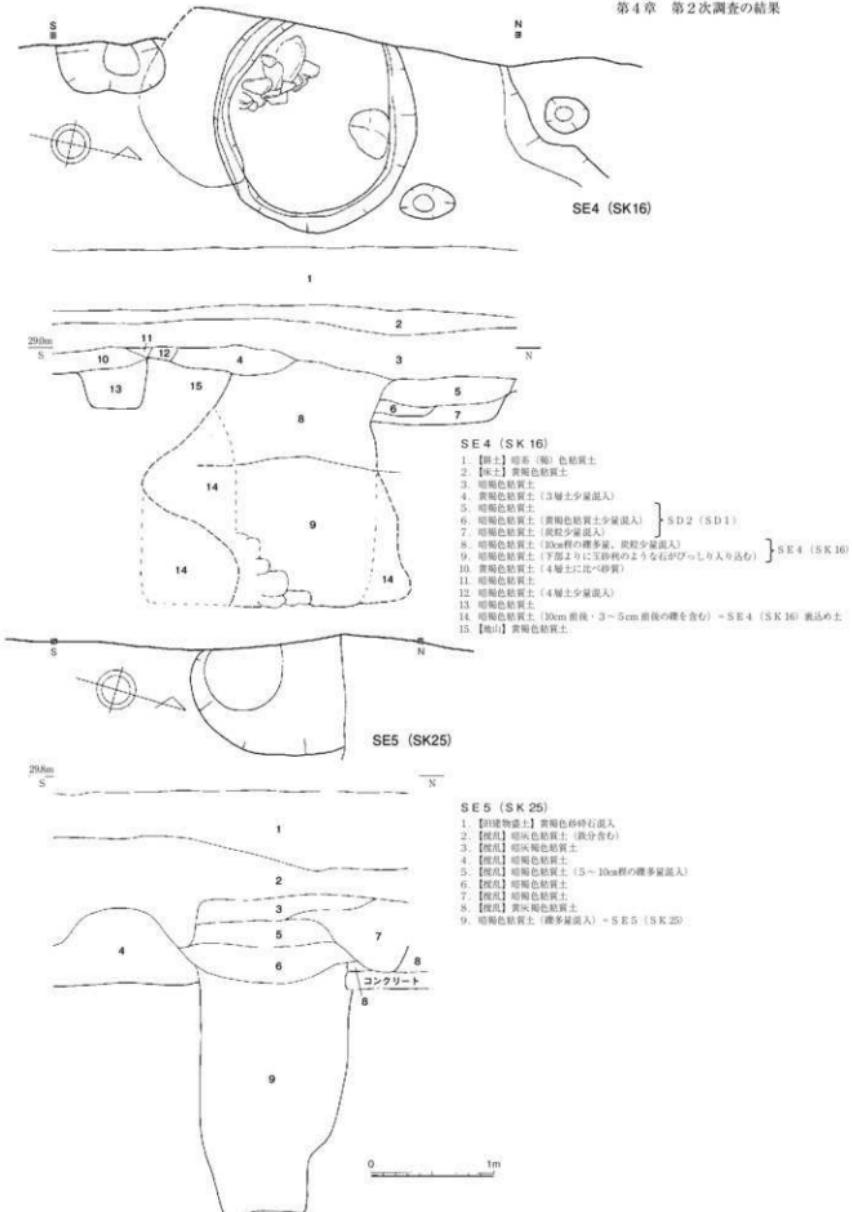
第14図 第2次調査構造断面図2 (S=1/50)



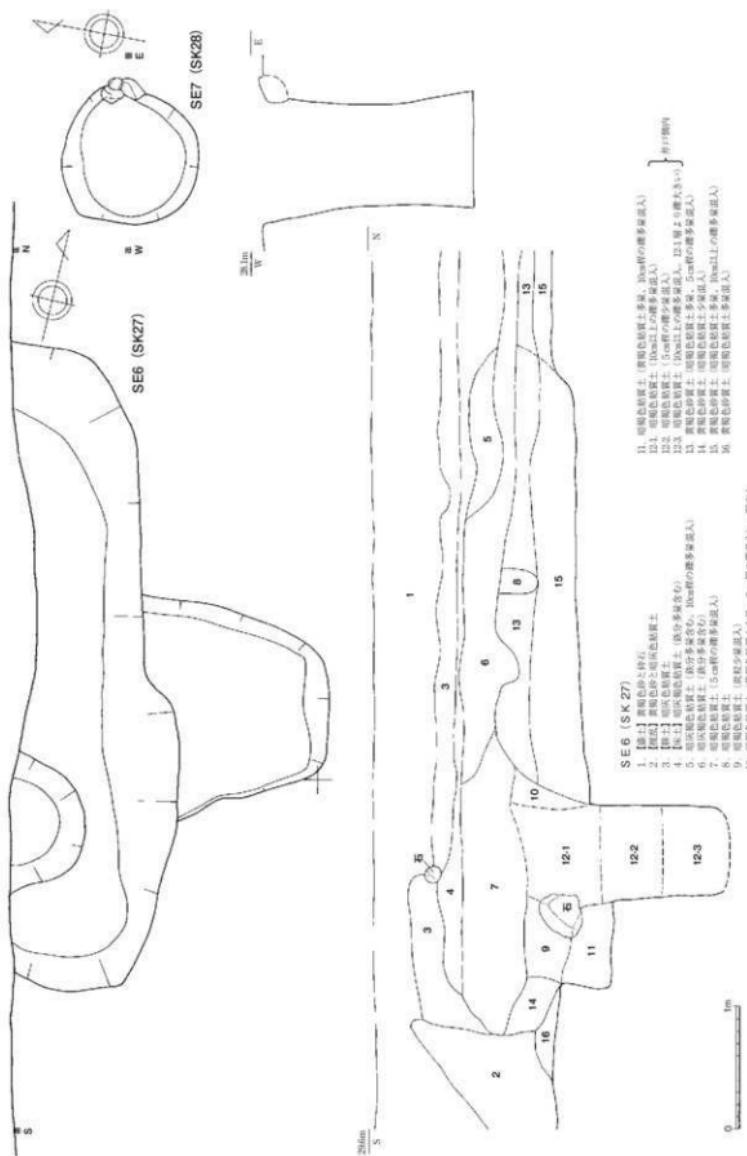
第15図 第2次調査造構平面図3・断面図3 (S=1/40)



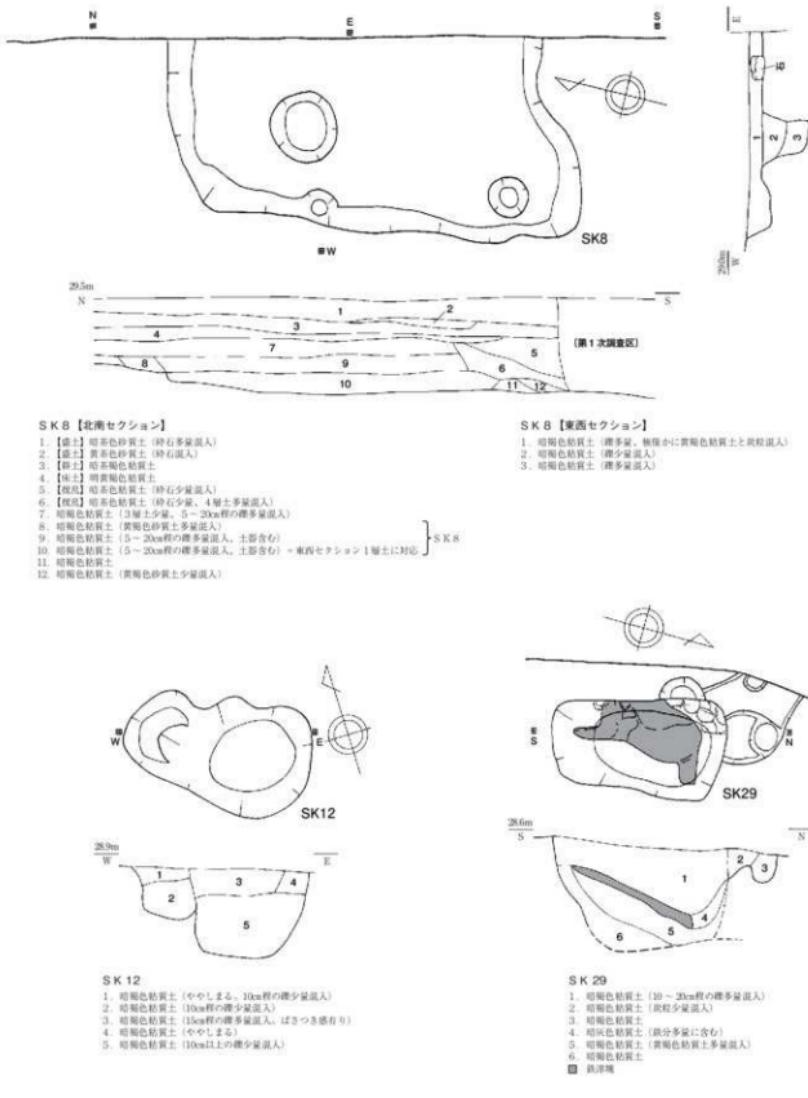
第16図 第2次調査遺構平面図4・断面図4 (S=1/40)



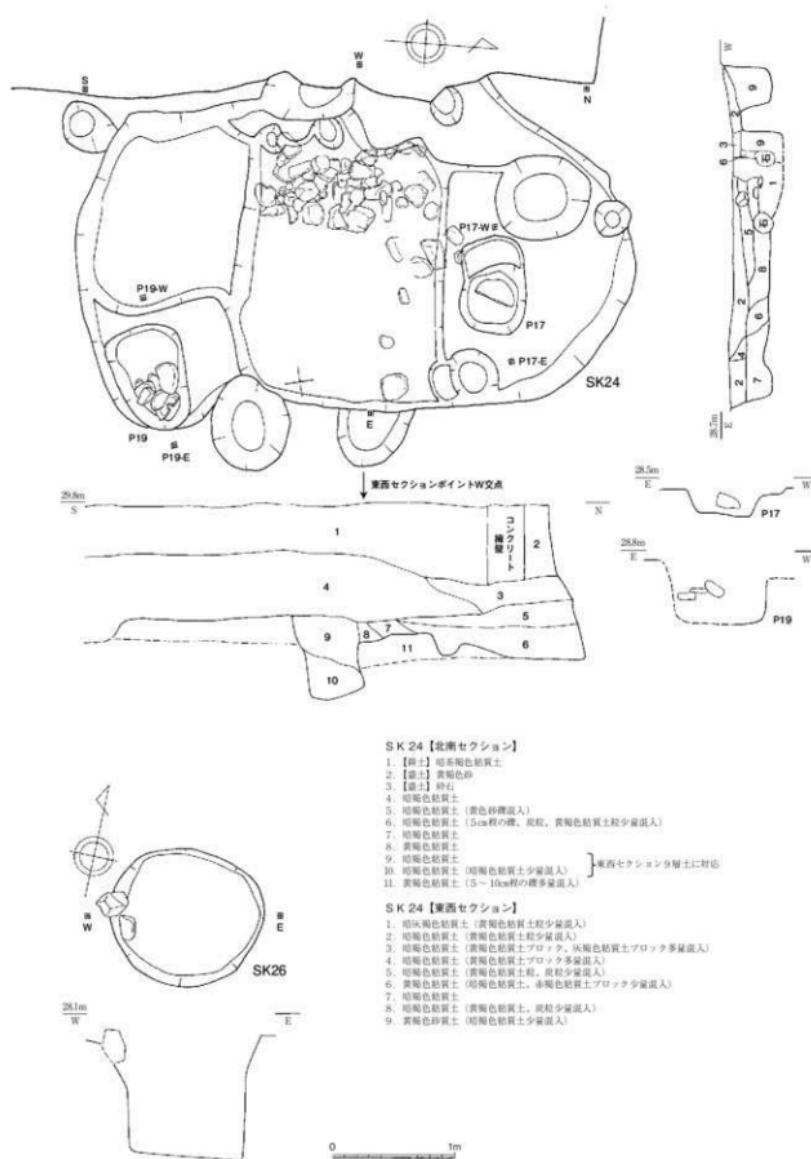
第17図 第2次調査遺構平面図5・断面図5 (S=1/40)



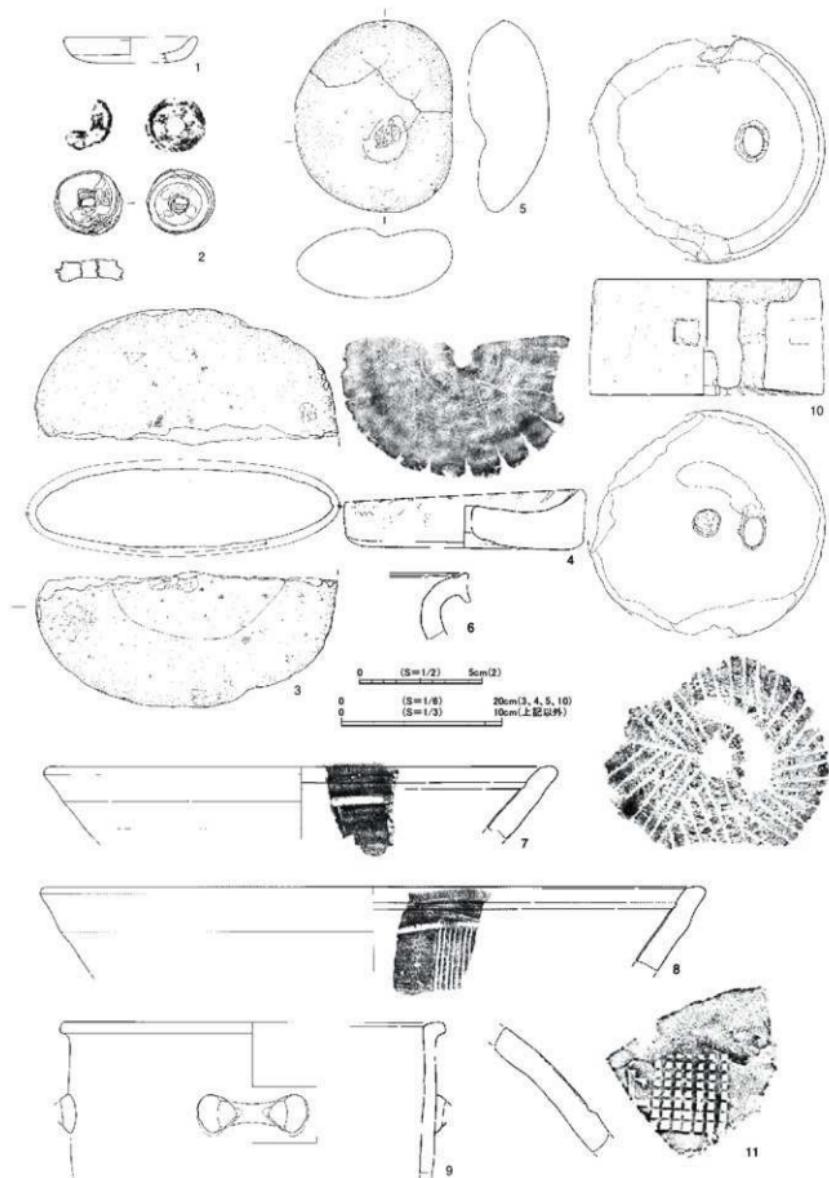
第18図 第2次調査遺構平面図6・断面図6 (S=1/40)



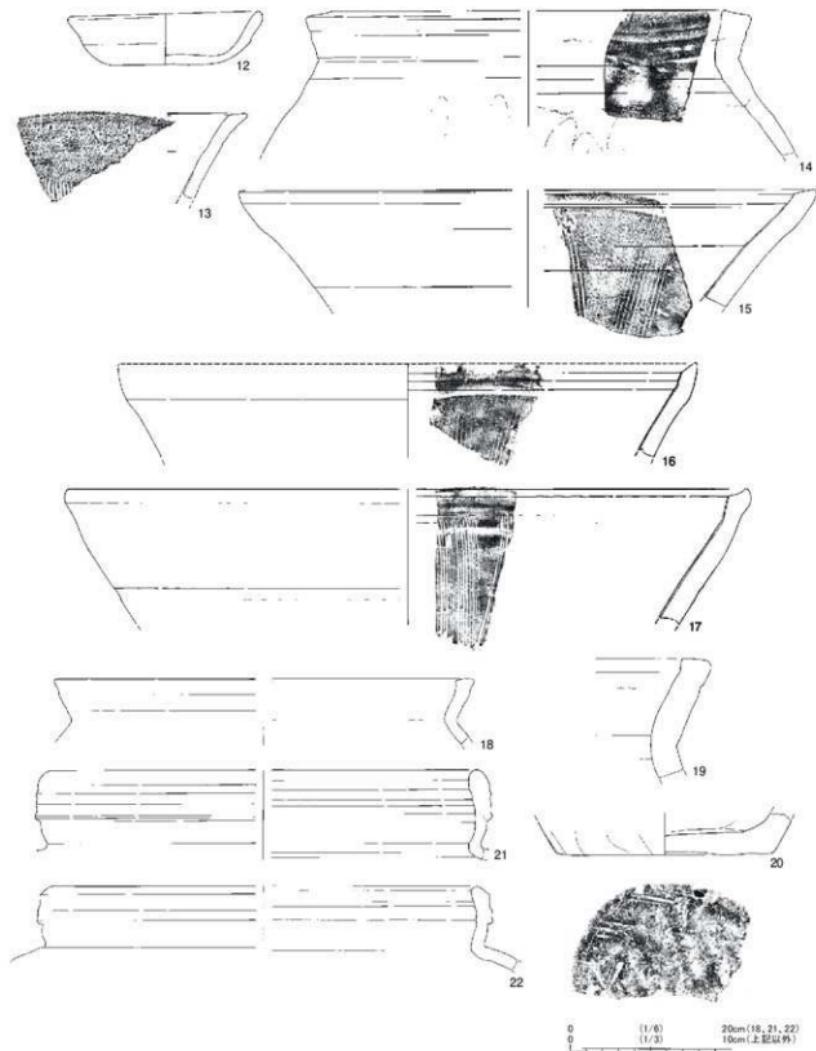
第19図 第2次遺構平面図7・断面図7 (S=1/40)



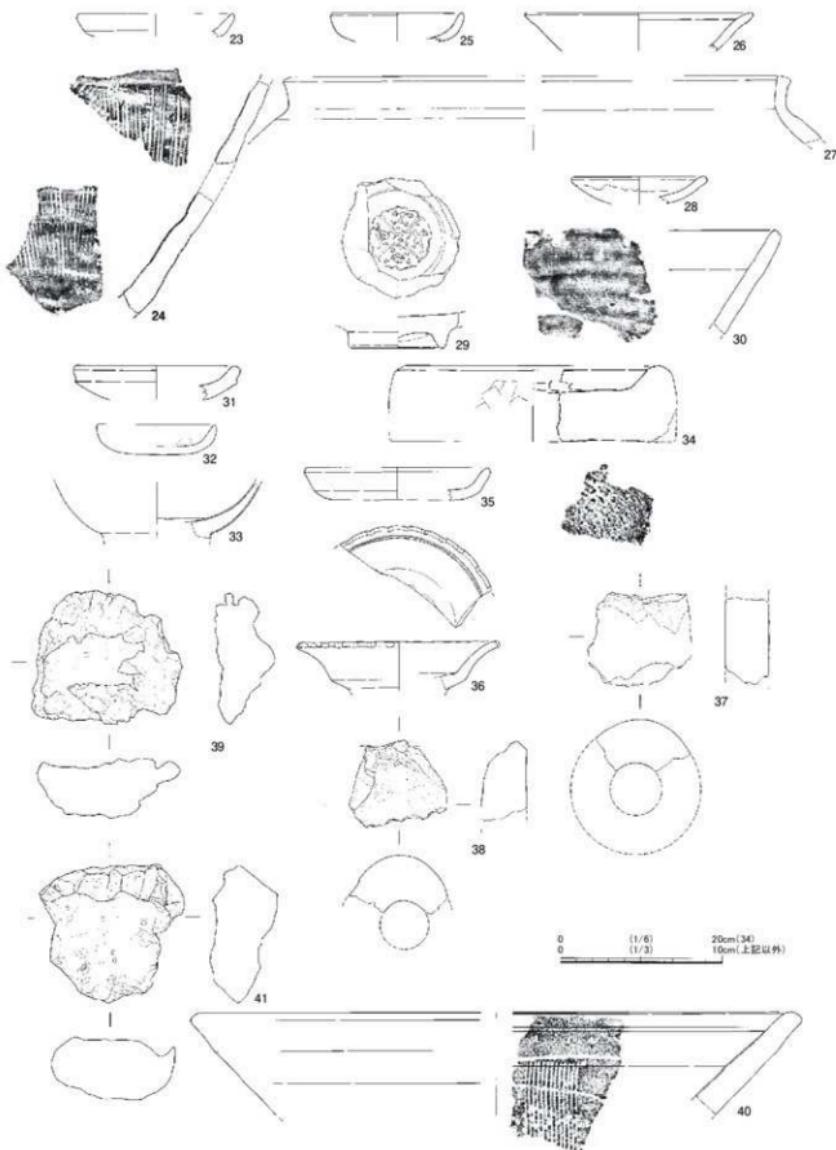
第20図 第2次調査遺構平面図8・断面図8 (S=1/40)



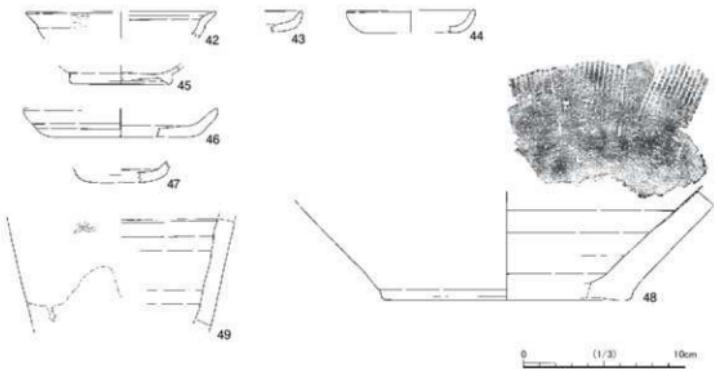
第21図 第2次調査出土遺物実測図1 (S=1/2-3-6)



第22図 第2次調査出土遺物実測図2 (S=1/3·6)



第23図 第2次調査出土遺物実測図3 (S=1/3・6)



第24図 第2次調査出土遺物実測図4 (S=1/3)

報告番号	出土地点	種類	口径(cm)	器高(cm)	色調(内)	胎土	焼成	調整(内)	調整(外)	寸	参考	図化番号		
								底径(cm)	重量(g)	色調(外)	時間(h)	温度(度)		
1 SK11 (SB3)	土器部	鉢	8	1.6	にぶい灰	微少	良	ヨナフ	2				D6	
	底				灰黄褐			ヨナフ						
2 SK11 (SB3)	金属製品	鉄製品	長(26)	厚0.9								8枚の鋼鉄が接合している 「二道元」、板熱有りか	金1	
		鋸	(28)	16.11										
3 PI17 (SB4)	石製品	長	(37.6)	厚10.2									石質は砂岩、鉄床石か	石2
	石	幅	(16.9)	8120										
4 PI19 (SB4)	石製品	上径	(29.4)	高7.5									FEI	石3
	石臼	下径	(29.2)	3820										
5 PI19 (SB4)	石製品	長	24.5	厚10.1									石4	
	石	幅	20.1	5740										
6 PI14 (SB7)	加賀焼		(42)			多	良	回転フ					D31	
	鉢							回転フ						
7 SE2 (SK10)	越前焼	31.6	(4.5)	灰白		多	良	回転フ	切口	1			D3	
	すり鉢			にぶい橙				回転フ						
8 SE2 (SK10)	越前焼	40.8	(5.3)	にぶい橙		多	良	回転フ	切口	1			D4	
	すり鉢			灰白				回転フ						
9 SE2 (SK10) 他	不明	23.7	(9.3)	素地 灰		微		回転フ		1	内外面細かい買入有り		D5	
SE4 (SK10)	鉄			素地 灰				回転フ						
10 SE2 (SK10)	石製品	上径	(29)	高14.4										
	石臼	下径	(27)	12400									上臼、芯棒径約25cm 抱木は	石1
													横打込み2個1月 石質は砂岩	
11 SE2 (SK10) 北側土塹	越前焼		(9.3)	浅黄橙		多	微	ヨナフ					G	
	鉢			灰白				ヨナフ						
12 SE3 (SK13)	土器部	11.7	35	橙		少	微	ヨナフ ヨナフ	5				D12	
	底			根				ヨナフ ヨナフ	9					
13 SE3 (SK13)	珠洲焼		(5.2)	灰				ヨナフ	切口					D10
	すり鉢			灰				ヨナフ						
14 SE3 (SK13)	越前焼	(27.6)	(9)	にぶい橙		少	微	回転フ					D11	
	鉢			にぶい橙				回転フ						
15 SE4 (SK16)	越前焼	(35.6)	(7.3)	根		並		回転フ	切口	1			D20	
	すり鉢			にぶい橙				回転フ						
16 SE4 (SK16)	越前焼	36	(5.8)	にぶい橙				良	回転フ	切口			D17	
	すり鉢			にぶい根				回転フ						
17 SE4 (SK16)	越前焼	(42.4)	(8.4)	にぶい根		並	微	良	回転フ	切口	1		D16	
	すり鉢			にぶい根				回転フ						
18 SE4 (SK16)	越前焼	(52)	(8.1)	にぶい根		少		良	回転フ				D13	
	鉢			にぶい根				回転フ						

第3表 第2次調査出土遺物観察表1

報告番号	出土地点	種類 器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm) 重量(g)	色調(内) 色調(外)	胎土			焼成 度	調整(内) 調整(外)	II III IV V	備考	固化 度
						厚さ mm	幅 mm	高さ mm					
19 SE4 (SK16)	越前焼 甕				(7.4) 赤灰 赤灰	多	並		良	回転竹 ⁺ 回転竹 ⁻		内外面自然釉	D19
20 SE4 (SK16)	加賀焼 甕		13		(26) 黄灰 黄灰	多	微		良	竹 ⁺ 竹 ⁻	4		D18
21 SE4 (SK16)	傷前焼 甕			(53)	(111) に赤い赤褐 に赤い赤褐	多			良	回転竹 ⁺ 回転竹 ⁻	1		D14
22 SE4 (SK16)	傷前焼 甕			(53) (103)	に赤い赤褐 灰褐	多	微		良	回転竹 ⁺ 回転竹 ⁻	1		D15
23 SE5 (SK25)	土師器 甕		(9.6) (1.4)		橙	少			良	竹 ⁺ 竹 ⁻			B
24 SE5 (SK25), 調査区単心部	珠洲焼 寸り鉢		(4.8)		灰 灰	並	並	少	有	竹 ⁺ 竹 ⁻	10日目		E
25 SK8-11	土師器 甕		8 (1.7)		橙	並			良	竹 ⁺ 竹 ⁻	1		D1
26 SK8	土師器 甕		14 (24)		に赤い褐	並			良	竹 ⁺ 竹 ⁻	1		D2
27 SK12	加賀焼 甕		(30.5) (39)		に赤い赤褐 に赤い赤褐	多			良	回転竹 ⁺ 回転竹 ⁻	1	内外面自然釉	D9
28 SK12	土師器 甕		8.4	1.7	浅黄橙 浅黄橙	微			良	竹 ⁺ 竹 ⁻	4	内外面油痕有り 内外面 剥離多い	D7
29 SK12	青磁 碗		(22)		赤地 灰白 輪 ⁺ 灰	微			良	回転竹 ⁺ 回転竹 ⁻	12	内面見込みに印花文有り	D8
30 SK21	加賀焼 寸り鉢		(6.4)		浅黄橙 浅黄橙	多	多	少	並	回転竹 ⁺ 回転竹 ⁻	沈線		F
31 SK23	土師器 甕		10 (21)		に赤い黄橙 に赤い黄橙	並			良	竹 ⁺ 竹 ⁻	2		D21
32 SK24	土師器 甕		(7.2)	1.8	に赤い橙	並	少		磨耗により不明		3		D22
33 SK24	青磁 碗		(3.5)		赤地 灰白 輪 ⁺ 灰				良			素地に気泡有り	D23
34 SK24	石製品 石臼	上径31 下径(35)	高9.4 2040									上臼	H5
35 SK29	土師器 甕		11.2	2	に赤い黄橙 に赤い黄橙				良	竹 ⁺ 竹 ⁻	2		D27
36 SK29	青磁 碗		12 (31)		赤地 灰 輪 ⁺ 灰				良		4	11種後花 見込みに文 様有り 内外面貫入有り	D26
37 SK29	土製品 輪の羽口	長(5.8)	厚2.7									外径8.1cm 内径32cm	C
38 SK29	土製品 輪の羽口	長(5.4)	厚2.8									外径小片により不明 径3cm	D
39 SK29	製鉄関連	長8.2	厚3.7										全3
40 SK30	鉄滓	幅9.3	246										
40 SK30	越前焼 寸り鉢	(36.9) (6.4)	灰褐 に赤い橙			並	少	微	良	回転竹 ⁺ 初日 沈線	1	初日13条 二次被熱	D25
41 SK30	製鉄関連	長8.5	厚4.2										全2
42 SD2 (SD1) 西	土師器 甕	(11.7)	1.6		に赤い黄橙 に赤い黄橙	少			良	竹 ⁺ 竹 ⁻			D30
43 SD2 (SD1)	土師器 甕	(9.9) (1.3)	に赤い黄橙 に赤い黄橙			少			良	竹 ⁺ 竹 ⁻			A
44 PI8	土師器 甕	7.8	1.4		に赤い橙				良	磨耗により不明	1		D28
45 I区検出面	白磁 甕	(5.8)	1.1		赤地 乳白 輪 ⁺ を帯びた通路				良			割れ口日に漆接板	D33
46 I区検出面	土師器 甕	12	1.8		に赤い橙 に赤い橙	少			並	竹 ⁺ 竹 ⁻	1		D29
47 I区検出面	土師器 甕	8											
47 I区検出面	土師器 甕	(5.6)	(1.3)		に赤い橙 に赤い橙	並	少		良	竹 ⁺ 竹 ⁻	3		D24
48 6区検出面 (落ち込みか)	越前焼 寸り鉢	(6.8)	に赤い橙			並	並	少	良	回転竹 ⁺ 初日 回転竹 ⁻	3	初日全分 内面と外部前面 用により省らか 割れ口に漆接板	D32
49 掘土	瓶戸美濃 瓶子	(6.6)	赤地 灰白 輪灰									外面細かい貫入有り	H

第4表 第2次調査出土遺物観察表2

第5章 まとめ

水田丸遺跡は、加賀市水田丸町地内の動橋川左岸の扇状地に立地するもので、2年次（平成18・19年度）に及ぶ調査の結果、平安時代から安土桃山時代の遺構・遺物を確認した。以下、確認された点について概要を記してまとめとしたい（第25図参照）。

平安時代では須恵器横瓶片の出土を認めるのみで、その後の鎌倉時代の13世紀中頃以降14世紀代より人々の活動が顕著にみられ、続く室町時代後期から安土桃山時代の15～16世紀にかけて本格的な様相を呈し、掘立柱建物・井戸・土坑等を検出し、土師器・陶磁器・漆器・石製品・鉄製品・銅鏡・輪の羽口・鉄滓が出土した。

掘立柱建物は総柱建物で7棟確認されたが、その内のSB4（桁間3間（9.6m）×梁間1間（3.0m）以上）とSB5（桁間2間（5.8m）×梁間1間（2.4m）以上）の前後関係は不明ではあるが建て替えとして認識され、SB6（桁間1間（4.4m）×梁間1間（3.7m）以上）はこれに連続した建物とみられる。さらに輪の羽口・鉄滓等を出土したSK29・30等がその付属施設として捉えられることから、これら建物等は鍛冶関連施設の可能性があるものである。即ち、SB4（SB5）を居住スペース、SB6を鍛冶作業関連スペースとし、鍛冶の際排出される鉄滓を貯めた施設としてSK29・30の土坑が利用されたものと考えられる^⑩。

以上、本遺跡は室町時代後期から安土桃山時代を中心時期とし、主に掘立柱建物・井戸等の住生活関連及び鍛冶関連の遺構・遺物から構成される集落跡であることが明らかとなった。



第25図 第1・2次調査区全体（合成）図（S=1/500）

注

鍛冶作業関連スペースと考えられる建物SB6については、今回は炉や鉄床等の遺構は検出されなかった（鉄床石と想定されるものはSB4柱穴P17より出土）が、屋内土坑にあたるSK19・22からの鉄滓の出土や廐津土坑（SK29・30）との位置関係等を考慮して機能を想定したものである。また火気の使用等を考慮すれば壁を全面に設げずによくとも西側の廐津土坑側は開放状態であった可能性が考えられる（中・近世の絵巻物や屏風絵（「大山寺縁起絵巻」、「喜多院職人尽絵」など）の場面からも全面に壁を設けない建物の様子が窺い知れる）。

引用・参考文献

- 遠藤元男 1985 「日本職人史の研究Ⅱ 古代中世の職人と社会」 雄山閣出版（株）
垣内光次郎 1999 「石の文化誌」[中世北陸の石文化] 第12回北陸中世考古学研究会資料集 北陸中世考古学研究会
奈良本辰也^{註10} 1961 「国説日本庶民生活史」第3巻 （株）河出書房新社
浜崎悟司^{註11} 2004 「小松市幸町遺跡」 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
久田正弘^{註12} 2006 「小松市矢田野遺跡群」 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター



発掘調査着手前の状況（北西から）



1区道構検出状況（南東から）



1区完掘状況（南東から）



1区完掘状況（北西から）



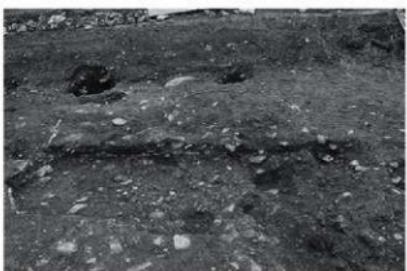
2区完掘状況（南西から）



3区完掘状況（南東から）



SB2・SK5 完掘状況（北西から）



SK5 土層断面④（西から）



SE1 (SK4) 完掘状況（北東から）



SK1 完掘状況（北東から）



SK2 完掘状況（北から）



SK5 完掘状況（北東から）



SD1 内漆塗碗出土状況



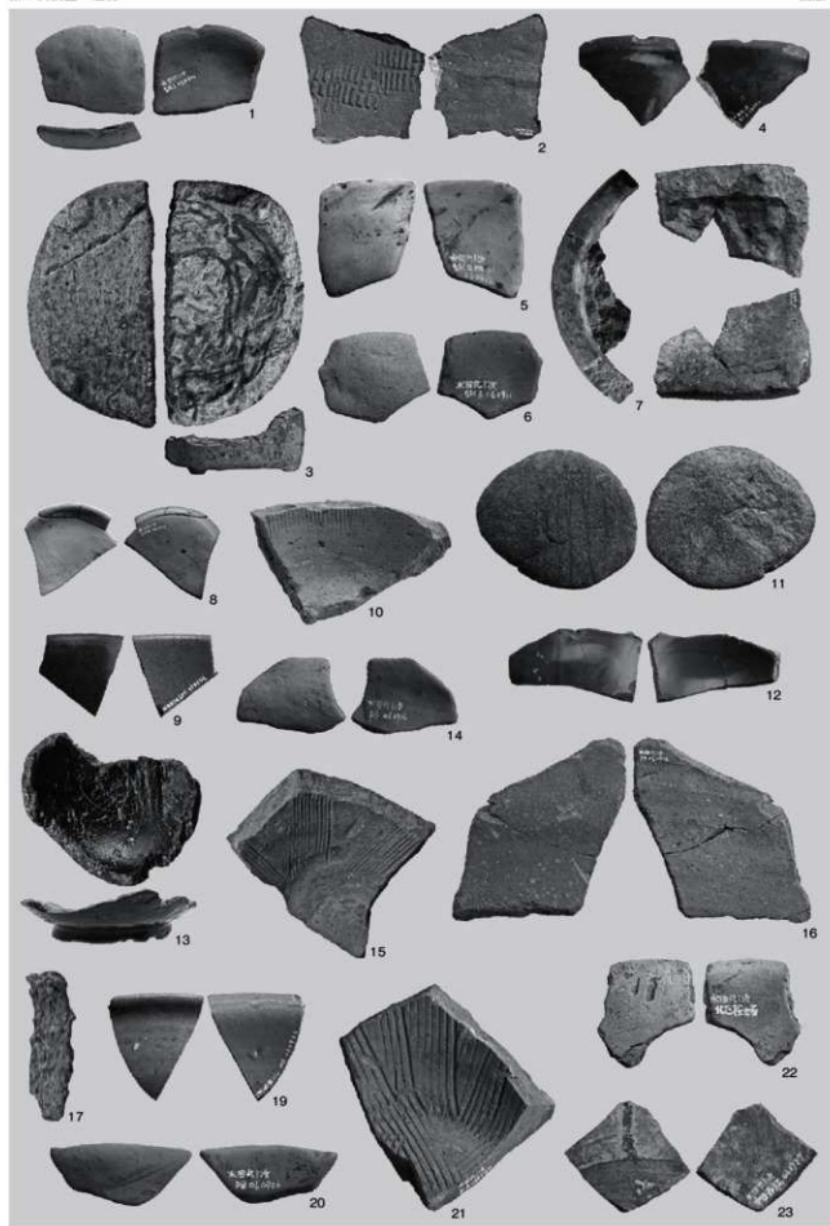
発掘作業風景（2区 北西から）



調査区南西壁土層断面A



調査区南西壁土層断面B





第2次調査区発掘状況（南東から）



第2次調査区発掘状況（北西から）



発掘調査着手前の状況（南東から）



遺構検出作業（南東から）



遺構検出状況（南東から）



遺構削作業（北西から）



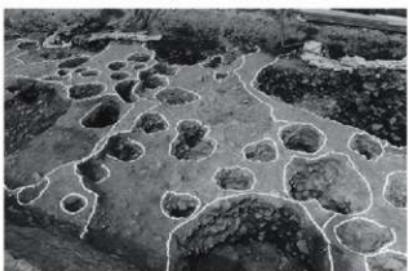
SD2 (SD1) 検出状況（南西から）



SD2 (SD1) 土層断面（南西から）



SE4 (SK16) 完掘状況



SD2 (SD1) - SE4 (SK16) 完掘状況（南西から）



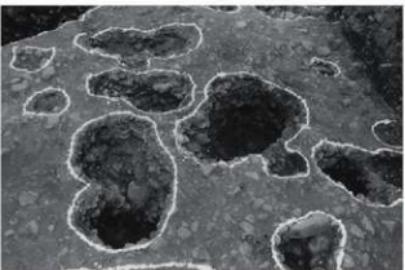
SK8・9・11・12 検出状況 (西から)



SK 8 完掘状況 (南東から)



SK12 土層断面 (南西から)



SK11・12 完掘状況 (南から)



SE2 (SK10) 検出状況 (南西から)



SE2 (SK10) 遺物出土状況



SE2 (SK10) 等完掘状況 (北から)



SE3 (SK13)・SK 21 検出状況 (南西から)



SE3 (SK13)・SK 21 完掘状況（南西から）



SE3 (SK13) 完掘状況（北東から）



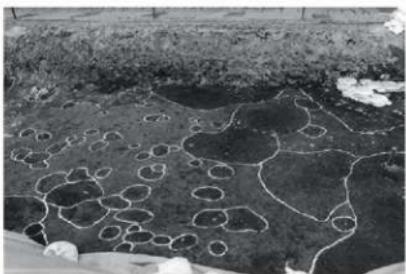
SE3 (SK13) 井戸側壁検出状況1



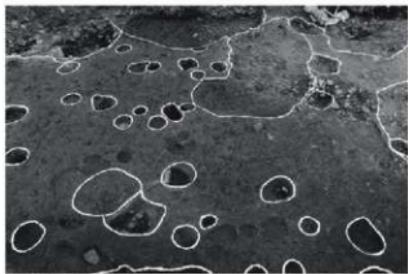
SE3 (SK13) 井戸側壁検出状況2



SE3 (SK13) 断ち割り断面（南西から）



SK18-19-22 検出状況（南西から）



SK18-19-22 完掘状況（南西から）



SK24 等検出状況（南西から）



SK24 東西土層断面 (南東から)



SK24 繊集中検出状況 (南東から)



SK24 完掘状況 (南西から)



SE5 (SK25) 等検出状況 (南西から)



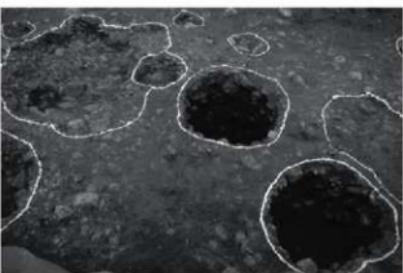
SE5 (SK25) 南北土層断面 (南東から)



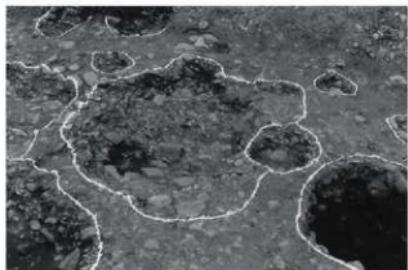
SE5 (SK25) 完掘状況 (南西から)



SK23・26・SE7 (SK 28) 検出状況 (南西から)



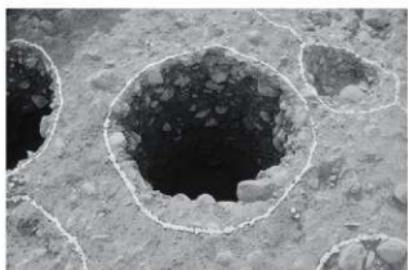
SK23・26・SE7 (SK 28) 完掘状況 (南西から)



SK23 完掘状況（南西から）



SK26 完掘状況（東から）



SE7 (SK28) 完掘状況（南から）



SE6 (SK27) 等検出状況（南西から）



SE6 (SK27) 北南土層断面1（南東から）



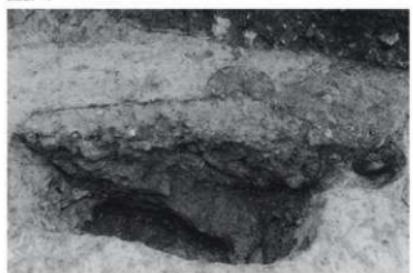
SE6 (SK27) 北南土層断面2（南東から）



SE6 (SK27) 完掘状況（東から）



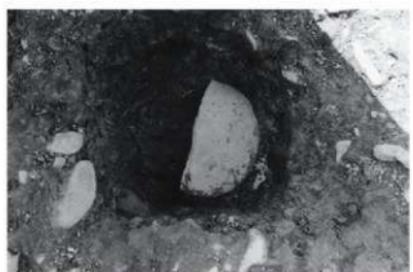
SK29 検出状況（北東から）



SK29 土層断面 (北東から)



SK29 完掘状況 (北東から)



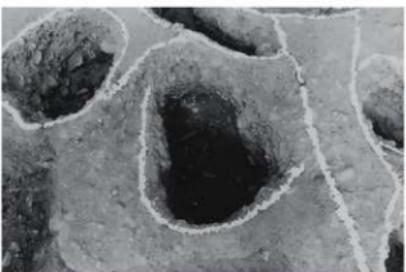
P 17 石製品出土状況 (北から)



P 17 完掘状況 (南東から)



P 19 石製品出土状況 (西から)



P 19 完掘状況 (西から)

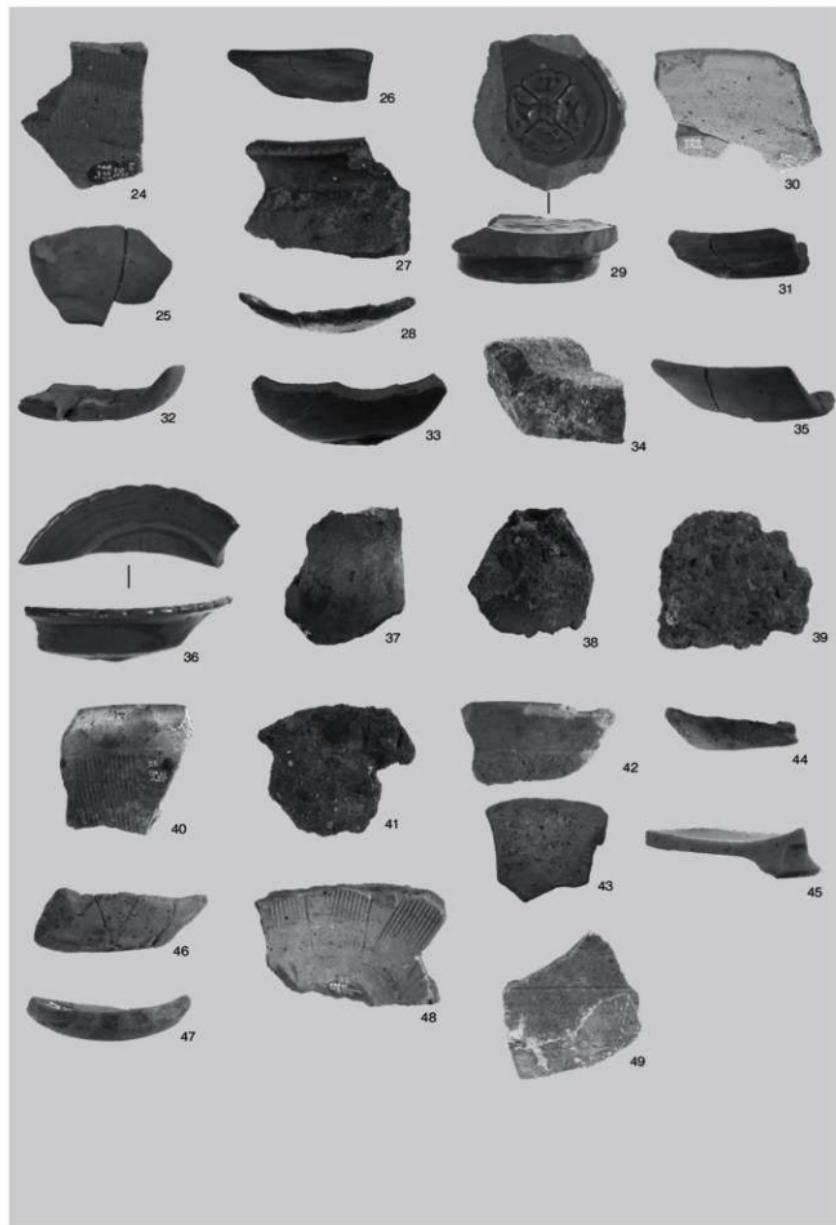


調査区西壁土層断面 (東から)



東谷口小学校体験発掘の様子





報告書抄録

ふりがな	かがし みずたまるいせき						
書名	加賀市 水田丸遺跡						
副書名	社会资本整備総合交付金事業主要地方道山中伊切線						
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	土屋宣雄、澤辺利明						
編集機関	財團法人石川県埋蔵文化財センター						
所在地	〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1 TEL076-229-4477 FAX076-229-3731						
発行機関	石川県教育委員会・財團法人石川県埋蔵文化財センター						
発行年月日	2011年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
みずたまる 水田丸遺跡	いしかわけん か べ し 石川県加賀市 みずたまるまち 水田丸町	17206	-	36度 17分 9秒	136度 23分 25秒	20050907～ 20051005 20060501～ 20060608	750m ² 記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
水田丸遺跡	集落	平安～安土 桃山時代	掘立柱建物、 井戸、土坑、溝	土師器、須恵器、 陶磁器、漆器、石 製品、鉄製品、銅錢、 轆の羽口、鉄滓			
要約	本遺跡は平安～安土桃山時代の遺構・遺物を確認した集落跡で、中心時期は室町～安土桃山時代にあたり、掘立柱建物、井戸、土坑、溝を検出し、土師器、陶磁器、漆器、石製品、鉄製品、銅錢などが出土した。また、土坑等から轆の羽口や鉄滓が出土したことから、鍛冶関連施設が存在したと推定される。						

加賀市 水田丸遺跡

発行日 平成23（2011）年3月31日

発行者 石川県教育委員会

〒920-8575 石川県金沢市篠月1丁目1番地

電話 076-225-1842（文化財課）

財團法人石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1

電話 076-229-4477

E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp

印 刷 鶴川印刷株式会社

